

だが、疊まれもしないで、煽つた襟をしめ加減に、細りと成つて、脇あけも探れながら、フツと宙を浮いて行く。……あ、あ、と思ふうちに、妹のが誘はれて、慥う並んでひらくと行く。後の裾が翻つたと見る時、ガタリと云つて羅の抜けたあとへ衣紋竹が落ちました。一つは操られるやうに、一つは抱くやうにと、見るうちに、床わきへ横に靡いて兩方裾を流したのです。私は悚然とした。

ばかりではありません。こゝで覺めるのかと思ふ夢でない所を見ると、此が空蟬に成つて、二人は、裏の松山へ、湯どのから消失したのではなからうか——些と仰山なやうであるが眞個……勝手を知つた湯殿の外まで密と様子を見に行つたくらるです。婦の事で、勿論戸は閉めてある。妹の方の笑聲が湯氣に籠つて、姉が靜に小桶を使ふ。その白い、かゞめた背筋と、桃色に成つた湯の中の乳のあたりが、卑い事だが、想像されて……たゞし、紅白の蓮華が浴する、と自讃して後架の前から急に聲音を立てて、二階の見霽へ歸りました。

や、二人の羅が、もとの通り、もとの處に掛つて居る、尤も女中が來て、掛け直したと思へば、それまでなんです、まだ希有な氣がしたのです。

けれども、午飯のお詠が持出されて、湯上りの二人と向合ふ、鯛のあらひが氷に乗つて、小蝦と胡瓜が揉合つた處を見れば無事なものです。然も女連はビールを飲む。ビールを飲む佛もなし、

鬼もない。おまけに、(冷蔵庫ぢやないわね)そ、そんな幽霊があるもんぢやありません。

況や、三人、そこへ、ころ／＼と晝寝なんぞは、その上、客も、藝妓もない、姉も妹も、叔母さんも、更に人間も、何にもない。

暮方、またひつたりと蒸伏せる夕風になりました。が、折から淡りと、入江の出岬から覗いて來る上汐に勇氣づいて、土地で一番景色のいゝ、名所の丘だと云ふのを、女中に教はつて、三人で出掛けました。もう土橋の下まで汐が來ました。路々、唐黍畑も、おいらん草も、そよりともしないで、たゞねばりつくほどの暑さではありましたが、煙草を買へば(私が)(あれさ、細いのが私の方に)と女同士……東京子は小遣を使ひます。野掛け氣分で、ぶら／＼七八町出掛けまして、地震で崩れたまゝの危かしい石段を、藪だの墓だのの間を抜けて、幾腕りかして、頂上へ——誰も居ません。葎簧張の茶店が一軒、色の黒い皺びた婆さんが一人、眞黒な犬を一匹、膝に引つけて居て、じろりと、犬と一所に私たちを視めましたつけ。……

此の婆さんに、可厭な事を聞きました。

甲 乙 ……此處で、姉の方が、隻手を床几について、少し反身に、浴衣腰を長くのんびりと掛けて、ほんのり夕靄を視て居る。崖縁の臺つきの遠目金の六尺ばかりなのに妹が立掛つた處は、誰も言つた事ですが、廣重の繪を其のまゝの風情でしたが——婆の言ふ事で、變な氣に成りました。

目の下の水田へは雁が降りるのださうです。向うの森の山寺には、暮六つの鐘が鳴ると言ふ。其の釣鐘堂も崩れました。右の空には富士が見える。それは唯深い息づきもしない霧です。沖も赤く焼けて居て、白帆の影もなし、折から星一つ見えません。

(御覽じやい、あないにの、どす黒くへりを取つた水際から、三反も五反と、沖の方へさ汐の干た處へ、貝、蟹の穴からや、によきくと蘆が生えましたぞい。あの……蘆がつくやうでは、此の浦は、はや近うちに、干上つて陸になるぞいの。然うもござりましょ。……去年の大地震で、海の底が一體に三尺がとこ上りましての、家々の土地面が三尺た、ら踏んで落込みましたもの、の。いま、さいて来た汐も、あれ、御覽じやい。……海鼠が這ふやうにちよろくと、蘆間をあつて、やがて、たゞ茫々と蘆ばかりに成るぞいの。……)

何だか獨言のやうに言つて聞かせて、鑄茶釜に踞んで、ぶつくと遣るたびに、黒犬の背中を擦ると、犬が、うくと、ぐうくと遣る。變に、犬の腹から聲を揉出すやうで、あ、あの婆さんの、時々ニヤリとする齒が犬に似て居る。薄暮合に、熟として居る犬の不氣味さを、私は始めて知りました。……

(——旦那様が泊らつしやつた、水戸屋がの、一番に海へ沈んだぞいの。)

霧の下に、また電燈の光を漏らさない、料理旅館は、古家の藁を黒く、亜鉛屋根が三面に薄りと光つて、あらぬ月の影を宿したやうに見えるながら、縁も庇も、すぐあの蛇のやうな土橋に、庭に吸はれて、小さな藤棚の逃げようとする方へ、大きく傾いて居るのです。

(……其の時は、此の山の下からの、土橋の、あの入江がや、もし……一面の海でござつたがの、轟と沖も空も鳴つて来ると、大地も波も、一齊に箕で煽るやうに揺れたと思はつしやりました。……あの水戸屋の屋根がの、ぐしやくと、骨離れの、柱離れで挫けての——私らは、此の時雨の松の……)

と言ひました。字の傘のやうに高く立つて、枝が一本折れて、崖へ傾いて居るを指して、

(松の根に這ひ縋つて見ましたがの、潰れた屋の棟の瓦の上へ、一ちさきに、何處の犬やら、白い犬が乗りましたぞい。乾してあつた浴衣が、人間のやうに、ぱつと欄干から飛出して、瀉の中へへばりつく。もうその時は、沖まで汐が干たぞいの。ありや海が倒に成つて裏返つたと思ひましたよ。その白犬がの、狂氣に成つたかの、沖の方へ、世界の涯までと駈出すと思ふ時、水戸屋の乾の隅へ、屋根へ抜けて黄色な雲が立ちますとの、赤旗がめらくと翳んで、眞黒な煙がもんくと天上まで上りました。男衆も女衆も、其の火を消す間に、帳場から、何から、家中切もりをしてござつた彼家のお祖母様が死なしやつた。人の生命を、火よりさきへ助ければ可いも

のと、村方では言ふぞいの。お祖母様が雛兒のやうに抱いてござつた小兒衆も二人、一所に死んだぞの。婿つゞきの家で、後家御は一昨年なくなりました……娘さんが一人で、や、一氣に家を装立てて居さつしやりますよ。姉さんちや。弟どのは、東京の學校に入つて居さつしやるで……地震の時は留守ぢやつたで、評判のようないは姉嬢でござりますよ。——家とおのれは助かつて、老人小兒を殺してはなうく黒犬を、なう、黒犬や——……

勝手にしろ。殺したのではない、死んだのである。その場合に、壓に打たれ、火に包まれたものと進退をとにもするのは、助けるのではない、自殺をするのだ、と思ひました。……私は可厭な事を聞いた、しかし、祖母と小さい弟妹を死なせて水戸屋を背負つて生残つたと言ふ娘分、——あの優しい婦が確にと、此の時直覺的に知りましたが——どんなに心苦しいか……此の狭い土地で、嗚ぞ肩身が狭からう。——胸のせまるまで、いとしく、可憐に成つたのです。

(可厭な婆さん……)

(黒犬が憑いてるやうね。犬も婆のやうだつたよ。)

石段を下りかゝつて、二人が然う云つた時、ふと見返ると、坂の下口に伸掛つて覗いて居ました。こんな時は、——鹿は贅澤だ。寧ろ虎の方が可い。磔を取つて投げようとするのを二人に留められて……幾つも新しい墓がある——墓を見ながら下りたんです。

時に——(見たいわね。)妹なぞも然う言つたのですが、お由紀さんは、それ切姿を見せなかつたのです。

大分話が前後に成りました。

乙 甲
處で、眞夜中に寝苦しい目の覺めた時です。が、娘分に對しても決して不足を言ふんぢやあない。……蚊帳の此の古いのも、穴だらけなのも、一層お由紀さんの萬事最惜さを思はせるのですけれども、それにしても凄まじい、——先刻も申した酷い繼です。隣室には八疊間が二つ並んで、上下だゞ広い家に、其の晩は又一組も客がないのです。此邊に限らず、何處でも地方は電燈が暗うございますから、顔の前に點いて居ても、疊の目が漸と見える、それも蚊帳の天上に光つて居ればまだしも、此の燈に羽蟲の集る事夥多しい。何しろ、三方取巻いた泥沼に群れたのが蒸込むのだから堪りません。微細い奴は蚊帳の目をこぼれて、むら／＼降懸るものですから、當初一旦寝たのが、起上つて、妹が働いて、線を手繰つて、次の室へ電燈を持つて行つたので、其れなり一枚開けてあります。其の襖越しにぼんやりと明が届く、蚊帳の裡の薄暗さをお察し下さい。——鹿を連れした仙人の襖の南畫も、婆と黒犬の形に見える。……あゝ、此の家がぐわしやくと潰れて乾の隅から火が出た、三人の生命が梁の下で焼けたのだと思ふと、色合と言ひ、皺といひ、

一面の穴と言ひ、何だか、ドス黒い沼の底に、私たち倒れて居るやうな気がしてなりません。

(あ、これは尋常事でない。)

一體小兒の時から、三十年近くの間——ふと思ひ寄りず、二人の婦の姿が、私の身の周囲へ顯はれて、目に遮る時と云ふと、善にしろ、悪いにしろ、それが境遇なり、生活なりの一轉機と成るのが、これまでに例を違へず、約束なのです。とに角、私の小さい身體一つに取つて、一時期を劃する、大切な場合なのです。

(これは、尋常事でない。……)

私は形に出る……此の運命の映繪に誘はれていま不思議な處へ來た——こゝで一生を終るのではないか、死ぬのかも知れない。

枕も髪も影に成つて、蒸暑さに沓脱ぎながら、行儀よく組違へた、すんなりと伸びた浴衣の裾を洩れて、しつとりと置いた姉の白々とした足ばかりが燈の加減に浮いて見える。白い指をすつすつと刻んで、瞳をふうはりと浮いて軽い。あの白蓮華を又思ひました。

取絶つて未來を尋ねようか、前世の事を聞かうか。——

唯、此の方は、私の隣に寝て居る。むかうへ、一嵩一寸低く妹が寝て居りました。

……三分……五分……

紅い蓮華がちらくと咲いた。幽に見えて、手首ばかり、夢で蝶を追ふやうなのが、何うやら此方を招くらしい。……

——抱きしめて、未來を尋ねようか。前世の事を聞かうか。——

招く方へは容易い。

私は、貴方、卷蓆の火を消しました。

爾時です。ぱち／＼と音のするばかり、大蚊帳の繼穴が、何百か、ありつたけの目に成りました。——蚊帳の目が目に成つた、——否、それが一つ一つ人間の目なんです。——お分りになり憎うございませうか知ら。……一齊に、その何十人かの目が目ばかり出して熟と覗いたのです。睜る、瞬く、瞳が動く。……馬鹿々々しいが眞個です。睜る、瞬く、瞳が動く。……生々として覗いて居ます。暗い、低い、大天井ばかりを餘して、蚊帳の四方は残らず目です。

私はすくんで了ひました。

いや、すくんでばかりは居られません。仰向けに胸へ緊乎と手を組んで、兩眼を押睡つて、氣を鎮めようとしたのです。

甲 三分……五分——十分——

乙 魔は通つて過ぎたらうと、堅く目を開きますと、——鹿と仙人が、婆と黒犬に見える、——其

の隣室の襖際と寢床の裾——皆が沖の方を枕にしました——裾の、袋戸棚との間が、もう一ヶ所通で、裏階子へ出る、一人立の口で。表二階の縁と、廣く續いて、兩方に通口のあるのが、何だか宵から、暗くて寂しうございました。——いま、その裏階子の口の狭い處にぼつと人影が映して色の白い婦が立ちました。私は驚きません。それは圓髻の方で……すぐ銀杏返のが出る、出て二人並ぶと同時に膝をついて、駒下駄を持つたらう。小兒の時見たのと同じやうだ。で、蚊帳から兩戸を宙に抜けて、海空へ通るのだらうと思ひました。私の身に、二人の婦の必要な時は、床柱の中から洋燈を持つて出て來た事さへありますから。……

「は、あ。」

著者は思はず肱を堅くして聞いたのであつた。

六

「——處が其の婦は一人きりで、薄いお納戸色の帯に、幽な裾模様、すつと蘆の葉のやうに映りました。すぐ背を伸ばせば届きます。立つて、ふはくと、凭りかゝるやうにして、ひつたりと蚊帳に顔をつけた。あ、覗く。……ありたけの目が、その一とところへ寄つて、爛々として燃えて大蛇の如し……とハツとするまに、目がない、鼻もない、何にもない、艶々として亂れたま

まの黒髪の黒い中に、ペろりと白いのつべらぼう。——」

「……………」

著者は黙つて息を呑んで聞いた。

「う、と殺されさうな聲を呑むと、私は、此の場合、婦二人、生命を預る……私は、むくと起きて、しにみに覺悟して、蚊帳を刎ねた、爾時、横ゆれに靡いて、あとへ下つた其の婦が、氣に壓されて遁げ状に板敷を、ふらふらとあと退りに退るのを夢中で引捉へようとなりました。胸へ届きさうな私の手が、迂るが早い、何とも申しやうのない事は、その婦は三四尺ひらりと空へ飛んで、宙へ上つた。白百合が裂けたやうに釣られた兩足の指が反つて震へて、素足です。藍、淺葱、朱鷺色と、鹿子と、絞と、紫の匹田と、ありたけの扱帯、腰紐を一つなぎに、夜の虹が化けたやうに、婦の乳の下から腰に絡はり、裾に擲んで……下に膝をついた私の肩に流れました。雪なす兩の腕は、よれて一條に成つて、裏欄干の梁に釣した扱帯の結目、丁ど緋鹿子の端を血に巻いて縋つて居る。顔を背けようくと横仰向けに振つて、よちつて伸ばす白い咽喉が、傷々しく伸びて、蒼褪める頬の色が見る／＼うちに、その咽喉へ隈を薄く浸ませて、身悶をするたびに、踏處のない、つぼまつた蹴出が亂れました。凄いと、美しいとも、あはれとも、……踏臺が置いてある。目鼻のない、のつべらぼうと見えたのは、白地の手拭で、顔の半ば目かくしをして居

乙 甲

たのです。」

俊之君は、やゝ、聲忙しく語つた。此處で吻と一息した。

「いま、此を處置するのに、人の妻であらうと、妾であらうと、娘であらうと、私は抱取らなければ成りません。

私は綺麗なものを、横抱きに膝に抱いて助けました。聲を殺して、

(何をなさる。)

扱帯で兩膝は結へて居ました。けれども、首をくゝるのに、目隠をするのは可訝しい。氣だけでも顔を隠さうとしたのかと思ふ。いや、然うでないのです。それに、實は死なうとしたのではない。私から遁げようとしたので、目を隠したのは、見まい見せまいぢやあない。蚊帳を覗くためだつたのだから餘程變です。」

七

「前後のいきさつで、大抵お察しでありませう。それはお由紀さんでございました。

申憎うございますけれども、——今しがた、貴方の御令閨のお介添で——湯殿へ參つて居ります、あの女なのです。

これでは……その時の私と、由紀とのうけこたへに、女のものいひが交りましたは、尙ほ申憎うございますから、わけだけを、手取早く。……

由紀は、人の身の血も汐も引くかと思ふ、干潟に崩家を守りつつ、日も月も暗く成りました。

……村の口の端、里の蔭言、目も心も眞暗に成りますと、先達て頃から、神棚、佛壇の前に坐つて、目を閉ぢて拜む時、そのたびに、恚う俯向く……と、衣ものの縞が、我が膝が、影のやうに薄りと浮いて見えます。それが毎日のやうに度重ると段々に判然見える。姿見のない處に、自分の顔が映るやうで、向うが影か、自分が影か、何とも言へない心細い、寂しい氣がしたのださうです。緋は那樣でない、縞の方が、餘計にきつぱりとしたのが、次第に、おなじまで、映る事に成つたと言ひます。たゞ、神佛の前にぬかづく時——ほかには何の仔細もなかつた。

乙 甲
處が當日、私たちの着きますのが、もう土橋のさきから分つたと言ふのです。それは別に氣にも留めなかつた。黄昏に三人で、時雨の松の見霽へ出掛けるのを、縁の柱で、悄乎と、藤棚越に伸上つて見て居ると、二人に連れられて、私の行くのが、山ではなしに、干潟を沖へ出て、それ切歸らない心持がして成らなかつた。無事に山へ行きました。——が、遠目金を覗くのも、一人

が腰を掛けたのも、——臺所へ引込んでまでもよく分る。それとともに、犬婆さんが、由紀の身について饒舌るのさへ聞えるやうで。……それがために身を恥ぢて、皆の床の世話もしなかつた。極りの悪い、蚊帳の所爲ばかりではないと言ひます。夜の進むに従つて、私たちの一舉一動がよく知れた。……

三人が一寢入したでせう、うと／＼として一度目を覚ます、其の時でした。妹の方が、電燈を手繰つて隣の室へ運んで居たのは。——（大變な蟲ですよ）と姉は寝ながら懶さうに團扇を動かす。蚤と蚊で……私も痒い。身體中、くわツといきつて、堪らない、と蚊帳を飛出して、電燈の行つたお隣へ兩腕を捲つて、むす／＼搔きながら、うつかり入ると、したゝかなものを見ました。頭から足のさきまで、とろりと白い膏のかゝつたはり切れさうな膚なんです。蚤を振つて脱いで居たので。……電燈の下へ立派に立つて、アハ、と笑ひました。（抱くと怪我をしてよ。……夏蟲さん——）（いや、どうも、弱つた。）と襖の陰へ、晩に押し置いて置いた卓子臺の前へ、くつたりと小さく成る。（生憎、薬が。）と姉が言ふと（香水をつけて上げませう、かゆいのが直るわよ。……）と一氣に其の膚で押し出て、（どうせお目に掛けたんだ、暑さ凌ぎ。ほゝゝ。）袋戸棚から探つて取つた小罎を持って、胸の乳、薰つてひつたりと、（これ、こゝも、こゝも、こゝも、こゝも。）蟲のあとへ、ひや／＼と罎の口で接吻をさせた。

あゝ、此の時は弱つたさうです。……由紀は佛間に一人、蚊帳に起きて端正と坐つて、そして目をつぶつて、さきから俯向いて一人居たのださうですが、二階の暗がりには、その有様が、下の奥から、歴々と透いて見えたのですから。——年は長けても處女なんです。何うしていゝか分らない。あつちへ遁げ、此方へ避け、たゞ人の居ない處を、壁に、柱に、袖をふせて、顔をかくしたと言ふぢやありませんか。

私は冷い汗を流した、汗と一所に掌に血が浸んだ。——帯も髪も亂れながら、兩膝を緊乎結へて居る由紀を、板の間に抱いたまゝ、手を離さうにも、頭をふり、頭を掉つて、目を結へたのはづしませんが、見くびつて、したゝかくひ込んで居た蚊の奴が、血をふいてぼとりと落ちたのです。

私は冷く成つて恥ぢました。けれども、その妹も、並んだ姉も、たゞの女、たゞの藝妓に、私が扱ひ得なかつたことは、お察し下さるだらうと存じます。

——痒さは、香水で立處に去りましたが、息が詰る、餘り暑いから、立つて雨戸を一枚繰りま

した。(お、涼しい。) 勢に乗じて、妹は縁の眞正面へ、蚊帳の黒雲を分けたやうに、乳を白く立
つたのですが、ごろ／＼ごろ、がたん。間遠に荷車の音が、深夜の寂寞を破つたので、ハツとか
くれて、藤椅子に涼んだ私の蔭に立ちました。此の音は妙に凄うございました。片輪車の變化が
通るやうで、そのがたと門にすれた時は、鬼が乗込む氣勢がしました。

姉がうつとりした聲で、(あ、私は睡い。……お寝よ、い、からさ。)(澤山おつしやいよ。)
餘り夜が深い。何だか、美しい化鳥と化鳥が囁いて居るやうに聞えた。(あ、梟が鳴いて居る。)
唯一つ、遙に、先刻の山の、時雨の松のあたりで聞えました。

此の、梟が鳴き、荷車の消えて行く音を聞いた時、由紀は、その車について、戸外へ出たはう
と思つたと言ひます。しかし氣がついた。いま外へ出れば、杖を探り、水を慕つて、屹と自殺を
するに違ひない。……それが可恐しい。由紀はまだ死にたくない未練があると思つたさうです。

——眞個です、その時戸を出たらば魔に奪られたに相違ありません。

私たちも凄かつた。——岬も、洲も、瀧も、山も、峰の松も、名所一つづ、一ヶ所一體の魔が
領して居るやうに見えたのですから。(天狗様でせうか、鬼でせうか、私たちとはお宗旨違ひだわ
ね。引込みませう可恐いから。) 居かはつて私の膝にうしろ向きにかけて居た銀杏返が言つたの
です。

です。

由紀は残らず知つて居ました。

それからは、私も餘程寝苦しかつたと見えます——先にお話しした二度めに目を覚ましますま
で、ものの一時間とはなかつたさうで——由紀の下階から透して見たのでは——餘り判明見える
ので、由紀は自分で恐ろしく成つて、此は發狂するのではないかと思つた。それとも、唯、心で
見る迷ひで、大蚊帳の裡の模様は實際とまるで違つて居るかも知れない。それならば、まよひた
けで、氣が違ふのではないであらう。どつちか確めるのは、自分で一度二階へ上つて様子を見な
ければ分らない。が深く堅く目を瞑つて居ると思ひつつ……それが病氣で、眞個は薄目を明けて
居るのかも計られない、と、身だしなみを、恥かしくないまでに、坐つてカタ／＼と筆筒をあけ
て、きものを着かへて、それから手拭で目を結へて、二階へ上つたのださうですが、數ある段を、
一歩も誤らず、すら／＼と上りながら、氣が咎めて、二三度下りたり、上つたり、……また幾度、
手で探つても、三重にも折つた手拭はちやんと顔半分蔽うて居る。……いよ／＼蚊帳を覗くと成
ると、餘りの事に、それが此の病氣の峠で、どんな風に、ひきつけるか、氣を失ふか、倒れるか

乙 甲

も分らない。その時醜くないやうにと、兩膝をくつたから、くつたまゝで、蚊帳まで寄つて來るのです、間は近いけれども、それでは忍んでは歩行けますまい。……扱帯を繫いで、それに縋つて、道成寺のつくりもののやうに、ふらふらと幽霊だちに、爪立つた釣身になつて覗いたのださうです。私に追はれて、あれと遁げる時、——たゞたよりだつたのですから、其の扱帯を引手繰つて、飛退かうとしたはずみに、腰が宙に浮きました。

浅間しい、……極が悪い。……由紀は、いまは生きて居られない。——恚うして居ても、貴方（とはじめて顔を振向けて、）私の抱て居る顔も手も皆見える。此が私を殺すのです——と云つて、置處のなささうな顔を背ける。猿轡とか云ふものより見ても可哀な其の面縛した罪のありさまに、（心配なさる事はない。私が見えないやうにして上げる。）

と云つて、目隠の上を二處吸つて吸ひました。

貴下、慰めるにしても、氣休めを言ふにしても、何と云ふ、馬鹿な、可忌しい、呪詛つた事を云つたものでせう。

手拭は取れました。

（あれ、お二方が。）

と俯向く處を、今度はまともに睫毛を吸つた。——そのお二方ですが、由紀が、唯、憚つたば

かりではなかつたので。すら／＼と表二階の縁の端へ、歴々と、圓鬚と銀杏返の顔が白く、目をぱつちりと並んで出ました。由紀を抱きかくしながら踞つて見た時、銀杏返の方が莞爾すると、圓鬚のが、額を含んで眉を伏せた、ト顔も消えて、衣ばかり、晝間見た風の羅に成つて、スーッと、肩をかさねて、階子段へ沈み、しづみ、トン／＼と音がしました。

二人の其の婦の姿は、いつも用が濟むと、何處かへ行つて了ふのが例なのです。

しかし、姉も妹も、すや／＼と蚊帳に寝て居た事は言ふまでもありません。

たゞ不思議な事は、東京へ歸りましてからも、其の後時々逢ひますが、勝手々々で、一人だつたり、三人だつたり、姉と妹と二人揃つて立つた場合に出會はなかつたのでございます。

——少々金の都合も出来ました。いよ／＼決心をして先月……十月……再び水戸屋を訪ねました時、自動車が杜戸、大くづれ、秋谷を越えて、傍道へかゝる。……あすこだつたと思ふ、紅蓮が一莖、白蓮華の咲いた枯田のへりに、何の草か、幻の露の秋草の畦を前にして、崖の大巖に抱かれたやうに、巖窟に籠つたやうに、悄乎と一人、淡くイんだ婦を見ました。

（やあ、水戸屋の姉さんが。）

と運轉手が言ひました。

ひらりと下りますと、

(旦那様——)

知らせもしないのに、今日來るのを知つて、出迎に出たと云つて、手に縋つて、あつい涙で泣きました。今度は、清い目を睨いても、露のみ溢れて、私の顔は見えない。……

由紀は、急な眼病で、目が見えなくなりました。

——結婚はまだしませんが、所帯萬事引受けて、心ばかりは、なぐさめの保養に出ました。——途中から、御厚情を頂きます。

……あゝ、歸つて來ました。……御令闈が手をお取り下さつて、と廊下を見つゝ涙ぐんで。

「髪も、化粧も、爲て頂いて……あの、きれいな、美しい、あはれな……嬉しさうな。」

と言ひかけて、無邪氣に、握拳で目を壓へて、渠は落涙したのである。

涙はともに誘はれた。が、聞えるスリツパの琵琶にも、其の(二人の婦)にも、著者に取つては、何の不思議も、奇蹟も殆ど神祕らしい思ひでのないのが、ものたりない。……

道陸神の戲

風の方が驚いた。びゆうと一唸り我がまゝに吹きには吹いたが、此のくらるな事で人間が一人、けし飛ばうとは思はなかつたらしい。……其處で吃驚してすくんだやうに吹留めた、息をひそめて静まつた。

場所は、大溝が蜿蜒と通つて、一方は低い崖に、まばら垣の續いた場末の町家の背戸で、片側は其の大溝以上に曲り崩れた一帯の土堀である。勿論、武士町の裏手に當るが、草も枯れ次第、落葉も落次第、積り次第に成つて居る荒果てた小路である。此のつゞきの一處に、以前、男と遁げようとしたきれいな妾の跨ぐ處を背後から追つて槍で貫いたと言つて、壁に流れた血のあとが塗りかへてもく形にあらはれて消えないと言傳へる土堀がある。……何處と書つて、堀の面は確ではないが、むかしから氣味を悪がつて、めつたに人通りのない處だつた。目下も然うである。あり來りの怪談だか、また、事實に裏がきをするかと思はれるのは土堀の低さで。……何のため低いのか、これでは用心には成るまい、傘をさして通ると、とんぼが覗くほどである。掛稻は高く、堀は低いのが、泰平を象徴する、むかし此の藩の誇りとも聞くが、或は然うかも知れない。で、此だけ低ければ、かよわい女でも、少々思ひ切つたお轉婆をすれば、容易に越えられよ

う。

いまは、つい二町とは離れない處を、電車が通つて居るが、それでも此の裏小路は寂然として居る。

尤も、兩方が一廉廣い町通りだから、どつちへ出るにも此處を歩行する必要は更にない。手近な處は家毎裏々の不精な芥葉場にも成つて居るから、深溝で、水も流れるのだが、いつでも支へて居る。それに尙悪い事は、崖の上の處に古い大な私立病院があるので、設備のよくない下水がみな流れ込むので堪らない臭氣がする。しかし、そのお庇で病院へ抜ける處に、一ヶ所こはれくだけれども假橋のやうなものが架つて居る。

たゞ兩方が背戸、また庭續きで畑さへあるから、樹木が多い、時節々々には櫻、もみぢの風情がある。もみぢの頃は寒いから、故と此處へ見に来るほどのもの好きもないけれども、花時分は、土地の公園だの、大川向うの山だのへ花見に出掛けた歸途が、日暮から掛けて、微醉で、ぞろぞろ往來する。酒にうかれて、からかつたり、からかはれたりする。女房、娘、男たちには、誂への小路で、朧夜などは特に人目を忍ぶのに可いさうである。世の中の、のんびりした頃には、植ゑて自分も樂まうし、人にも見せようと言ふ、町家の亭主、邸の隠居などがあつて、朝顔や菊もつくつたので、いまは雨風に荒び果てたが溝端には柳さへ植つて居た。

その、ひよろ／＼と瘦せた枯葉の柳が一本ある下に、袖も裾も残すことか、番傘を持つたま、仰向けに風に吹倒されて、溝泥へつづり陥つて、陥つたなりで、ぼかんとして居る男がある。氣のもので……こゝが人足の頻な處だつたら、不用意のうちにも、鮎の如く跪いて、とに角跳上つたのであらうと思ふが、小路一條、前後に人通のなかつたことは豫め承知だつたに相違ない、陥る時、油紙は三ツに裂け、骨のばら／＼に折れた傘を枕にして、上半身に敷いたから、肩胸は然までもないが、煽つて開いた外套の袖へ、上澄の汗が流れ込んで、腰は溝泥に埋れて居た。――あとで聞くと、此の外套もそんなに安いものではない、中くらの贅澤な一着である。――身なりも相應にかけて居る。

「何とも申しやうもない、此のあり状だけでも、死んだのでもなし、打處が悪かつたのでもなし、下が底なしの沼でない以上は、別に生命には差支へない。そこで、ばちや／＼、どろ／＼とやつて石垣へ手を縋つて這上つた。

足駄と傘は、もう溝の中で古草鞋同然に打棄つた。それでも、流行の中折帽は、上ると、ぐしやぐしやと脱いで未練らしく掴んだが、餘り汚いので、ぼたんと棄てて、その時指を嗅いで見て、はじめてふる／＼と身ぶるひした。此が此の男の溝から這上つた第一の行動である。

いま吹いた風にだつて形容は出来まい。何とも言へない顔色だが、その容貌は満更でなし、背

恰好も……溝に塗れさへしなければ……調つて居る。

私は實は此の男を知つて居る。その、それ／＼の影間では、一寸人の知つた劇作家だ。

しかし、こゝでは何うも名のらせ憎い。劇作家先生のために憚るのである。私は芝居は餘り知らないが、茶屋、小屋の席で、女連が、よく權九郎と云ふ事を言ふ。何でも泥田へ陥込んで、舞臺へ這ひ上つてから噓をすると、同時に、鼻から鱈を吹き出すと言つた役柄ださうである。丁ど可い、いや生憎、此の溝に鱈は泳いで居ない。

――今朝は霞が降つた――

風も凧で、蚯蚓も引込んだ頃だから、鼻から鱈だけは負けてもらつて、假に權九郎先生として置く。

先生は、今度久しぶりで、こゝが故郷へ、旅行の意味で來たのであつた。

處で、歩行く處もあらうのに、選好んで、こんな希有な小路へ入つたのは、途に迷つたわけではない。まつたく地の理に通じて、此處のみみちを見て通るつもりであつた。實は小兒のうち、住家が、崖上の病院近に、古城の荒れた大手まはりにあつたと言ふし、先生も、漸と小學校へ通ふ頃には、くらし向きの貧しさに、東京だと朝の納豆と言ふ處を、雪の山國では、暮の頃から冬深い時を掛けて、「棒飴、かん／＼糖。」と言ふものを、「棒飴、かん／＼糖。」と寒さに震へながら、

泣聲で賣つて歩行く。夜ばかり。夜遊びのかるた、雙六の兒たちのわびた菓子にも成るらしい。が、主としてはその可哀さが、大人の同情をひく商賣であらう。北國は雨が多い。特に冬となると殆ど晴間がない。時雨、雲の降る眞暗な夜の町を、びしよりとと莫塵、合羽で、とぼくして、「棒飴、かんく糖」と、人魂のやうな提灯をたよりに泣いて行く幼兒の姿は實際可憐でいぢらしい。——先生も此を遣つたさうだから、いづれ、住んだ町も場末には相違ない。が何しろ近まはりで、此の小路の景色を知つて居たからであつた。

で、服装も……あり来りだが、縮でない大縮を揃へて居たから、棒飴賣の莫塵に較べれば故郷へ歸であらう。が、だしぬけの霰に、今朝、吃驚したほど、陽氣がわり合に暖かかつた所爲か、小路の樹は櫛さへもまだ染め果てて居なかつた。

でも、土塚にかぶさつた、山椿、庭とこ、大いのは榎、槐などの枝葉の蔭に、二本三本、薄く染めたのがあつて、溝橋むかうの雲も暗い奥を見込んだ處には、血のやうな梢の、雨に濡れて雲切れの蒼空へ、點滴るばかり眞紅のが見えた。傳説に聞けば、其の場所が美しい妾の貫かねた處とも言へよう。

いや、其處どころではない。もみぢの色のしたゝるのは可いが、溝汗のぼたく、雫する先生を何うしよう。

近松の淨瑠璃にいゝのがある、——（田蓑の島のやもめ鶴、濡れて立つたか可哀さに）——しかしそれは溝ではない。それに嘉平治は色男である。

處へ——もう一つ淨瑠璃慣用の文句を借りよう、——（果報か、因果か）——其處へ顯はれた婦がある。嵯峨だと駕籠に乗つて居て、その男の濡れて立つたる可哀さに、雨どひを取つて、ひらりと投げるのであるが、そんなのが此處へ来る筈はない、尤も殺されたお妾の幽霊は駕籠に乗つて出ようも知ねぬが、然うではなかつた。

不斷着にしても見すばらしい黒つぽい銘仙の着もので、コオトなどは着て居ない。紫コオル天の肩掛を深々と襟へ巻いて、お、寒、といった形に折込んだ袖に、時雨空の用心に、蛇目傘を伏せて抱いて片手も冷たさうに——包み方ですぐ知れる——すき切れのした、それでも縮緬の袱紗で、薬瓶を下げて居る。櫛の齒も入れないらしいが如何にも房りした髪を、當世の束髪で大柄で色白だから小路に目立つて、背負上の色と袖口にこぼれた紅入は、わびし氣な中にも媚かしい。一體が圓顔だが、頤にやつれが見えて、が、眉の濃い、鼻のスツと隆い年紀は二十六七なのが、その奥の暗い方から、陰氣に寒さうに出て来て、溝橋の袂で、權九郎先生の其の状を一目見ると、空は暗く、雲は低くても冬の大氣は透通るから、顔容に少しもおぼろげな處はなかつた。

「あら。……」

泣聲で賣つて歩行く。夜ばかり。夜遊びのかるた、雙六の兒たちのわびた菓子にも成るらしい。が、主としてはその可哀さが、大人の同情をひく商賣であらう。北國は雨が多い。特に冬となると殆ど晴間がない。時雨、雲の降る眞暗な夜の町を、びしよりとと莫塵、合羽で、とぼくして、「棒飴、かんく糖」と、人魂のやうな提灯をたよりに泣いて行く幼兒の姿は實際可憐でいぢらしい。——先生も此を遣つたさうだから、いづれ、住んだ町も場末には相違ない。が何しろ近まはりで、此の小路の景色を知つて居たからであつた。

で、服装も……あり来りだが、縮でない大縮を揃へて居たから、棒飴賣の莫塵に較べれば故郷へ歸であらう。が、だしぬけの霰に、今朝、吃驚したほど、陽氣がわり合に暖かかつた所爲か、小路の樹は櫛さへもまだ染め果てて居なかつた。

でも、土塚にかぶさつた、山椿、庭とこ、大いのは榎、槐などの枝葉の蔭に、二本三本、薄く染めたのがあつて、溝橋むかうの雲も暗い奥を見込んだ處には、血のやうな梢の、雨に濡れて雲切れの蒼空へ、點滴るばかり眞紅のが見えた。傳説に聞けば、其の場所が美しい妾の貫かねた處とも言へよう。

いや、其處どころではない。もみぢの色のしたゝるのは可いが、溝汗のぼたく、雫する先生を何うしよう。

風情に似ない、快活らしい聲を掛けると、臺所穿の緒のゆるんだ足駄で駆け寄つたから、すぢりもぢりに裾が亂れて、前垂の下に紅いのが亂れた。

「まあ、先生。」

「お、お嬢さん——」

と、それでも人間の聲で言つた。

——いま此の婦は、……別に其の姉きみとともに、町の目貫の大商人の娘たちで、權九郎先生が、小兒で棒飴を賣つた時の、對の友染のお花主であつた——莫塵着た雲の姿を思へ。——こゝで其れを言ふのは、先生を餘計にふるへさすのではない、却つて、寒さ凌ぎに適當であらうと思ふ。……

「また、お嬢さんは眞個に止してね。……一體全體、何うなすつたつていふのよ、先生、それは？」

「お話に成るもんですか。何にも彼にも此の體です、面目次第ありません。」

「餘り姉にお迷ひなさるからさ。おほ、。」

と笑つた。あの、頸まで搔すくんだ寒がり、男に向ふと、肩も、袖も、膚まで暖さうに、柔かく成つて解けたのである。

「御覽なさいな。とうとう溝へなんかはまつつて、何うしようつて言ふんです。」

「方がへしが着きません。恚うなりや圖々しく、何うにかにして下さいと言ひたいんですが、……御迷惑は分つて居ますから、何うにでもして下さい、御勝手です。」

「勝手だつて仕やうがないわ。餘りだらしがなさ過ぎて馬鹿々々しいツたらありやしない。」

と云つた。なまじ、おいたはしいなぞと甘やかすと、此の場合、やわな先生は倒れて了ふ。蓋し早打を嘗る術だ、令妹は軍師と見える。

「何しろ堪りませんね、困つたわね、それぢや、……さあ、一時しのぎ。代ものは、色氣がなさ過ぎますが、膚でも暖めてありますよ。」

桃色の懷爐である。

「はい、さあ、私のだと思つて氣味を悪がつては可厭ですよ。姉妹だから姉の血も通つて居ます。尤も、川の水と、此の溝ぐらゐる違つて居るかも知れないけれど、先生だつて、さしあたり溝なかなまだわね。」

「何とも申しやうがない。何にいたせ此はありがたい、此はありがたい。」

「血が通つてると聞いただけで、くわツくわ、ほれるでせう。暖かいわね。」

「汗が出ます。」

と兩の手を懐へ、下腹を抱へて、しやがんだ時、令妹は、柳の細い幹に手の蛇目傘を立掛けた。

「さうして……これから？」

「え？」

「逢ひに行く處なの、……歸りがけ。……それとも、もう昨日のうち逢つたんですか。」

「どちらへ。」

「どちらへぢやあないぢやありませんか。芝居なんかお書きなさる癖に……」

先生の顔色まるでなし。

「今年の春もさ、此の土地で、あんな芝居をさせてさ……二十年も前の事だし、他人はもう誰も知らないから可いけれど、(戀の飴賣)なんのツて、第一外題が甘ぢやんだわねえ。」

「……………」

「姉が見たら何うだらう。……あの人は芝居どころぢやあなかつたから見やしなかつたけれどもさ。——一所に居た、私の娘さへ、ちやんとそれだつて事が分つたぢやありませんか。」

「今度の汗は冷い方だ。」

と、權九郎先生は手の甲で額を擦つた。

「お美根さん(姉の名)はあの通りだから、打つかつて言つても、(私見たやうなものにそんな)か

何かで、卑下謙遜で眞個に、眞個にはしないでせうけれど、私の方は、おませでね……少々身を持崩しの形ですからね。——あんな芝居をかく方だもの、何を言つても構やしない。」

と、くもつた聲を明るく戻した。

「一家は絶えるし、夫には生別れ、死別れで、姉妹がおなじ不幸で落魄れても、姉は(落人)で、

私は(夜遁)の方ですからね、……おませよ。……だから、はじめから、薄々知つては居たけれど、

あんなにまで、お美根さんに惚れたのかねえ。先生あなたは——生命もいらぬほど眞剣に——

一所に見物した私の娘は、私より、まだおませだと見えて、私よりか餘計に感心して、(生命も要

らない……それ以上だわ)と言ふんです。おや、それ以上、……生命もいらぬ以上ツて、一寸

何うするんですの、先生……あ、もしかすると溝へおつこちる事かも知れない。ほ、ほ。」

「何とでもおつしやい。唯息のあるばかりですよ。」

とばかりである。

時に、妹御は自分の娘の事を言つた、——實は、身邊も境遇も時日も、此國と東京ほど隔つて

棒飴の形くらゐな小さな立志傳中の我が主人公は、十年にも二十年にも、姉妹たちの状況を窺

かにはしなかつた。……突然、夏のはじめ、今様の封筒、細君の取次には聊か穩かならぬ手紙を

受取つた——はじめに、……お美根さん——今川の私は姪です。お美根叔母さんの私は姪です。

（即ち此の妹の娘に當る。）と名のつて、今度の小町座の演劇を拜見して、私の母……御存じと思ひますが、多根子に聞いて、悉く先生の事をうけたまはりました。小學校の時分から、お名は知つて居りましたのに。……と言つて、——要するに、——いまの身の上は棒飴賣です、お傍へ參つて志を遂げたいと言ふのである。年は十六だと言ふ。

先生は紅梅の中から鶯が銜んで来て、玉づさを授けたやうな時めきを感じた。勿論その手紙が薄紅の封筒と、色インキが使つてあつたためではない。今川お美根さんの名ゆゑであつた。しかし、母と言ふ妹の多根子さんに返事をした。少女が都への夢見るやうな、あこがれを非難した事、それだけでも解るが、手紙の名宛がお兄様でなくて、をち様であつたと言へば、尙よく解る。多根子さんから折返し、返事があつて、お考へ通り。よく娘に意見する事、ことに、母には内證で、わがま、を申上げた若い娘を御遠慮あそばし、その母におんかへりぶみたまひしこと、と淺からず禮がのべてあつた。

一夏、秋も過ぎ、此の冬歸省したのである。——

權九郎先生に取つては、此のくらゐ張合のある、好都合の歸省はあるまい。

考へても見るが可い、雲泣きの小僧があはれがられたばかり、——姉は土地第一の豪家の令室と成つた——いはれなき人に情誼を通ずるには、二十幾年來これだけの機會はなかつたであらう。

それは先づ妹を訪ねて、其の娘の動靜を見舞へば、すらくと道は展けるのである。

——昨日は豫定通り、手紙の處がきを辿つて、多根子さんの住家を訪ねた。場所はたとへば此處から町を中に、大川を一つ隔てた山の根の矢張り士族町であつたが、行くと、他人が住つて居て、わづかに五月ばかりの間だつたのに行方が知れない、——先生は、あゝ運命だ、と歎息したほどである。我がこれほどの念が、爾一朝にしてたやすく遂げらるべきものではない。慙う、あきらめながら、あきらめ兼ねた。——くどくは言ふまいが、抜け出した魂を採すほどつきつめて、それでも辛うじて居處を知ることが出来た。一寸見當の違つた町の綿屋とか古着屋とかの二階借をして居るのだ。と分つて、搜り當ると、綿屋は綿屋だが、ぼろ綿の打直し屋で、先生が目を据ゑて、そこを訪ねた時、「お留守。」で、再び落膽した。しかし行つた先は分つて居る。

「お二階の奥さんも、御不幸つゞきで近々に九州の方へお引越しになりますのぢやが、唯今は、據ない御親類に、手の放されぬ病人がござりますので、其處へ看病に行つてござりますよ。」先生は更に落膽した。が、綿屋の媪さんが他國ものと見て深切に、そんなに遠方ではないからと、小さな娘を其の出さきへ見せに遣つてくれた。店前に腰をかけて待つ間の心持は、さながら魂が古綿に成つて燃えたのである。

（即ち此の妹の娘に當る。）と名のつて、今度の小町座の演劇を拜見して、私の母……御存じと思ひますが、多根子に聞いて、悉く先生の事をうけたまはりました。小學校の時分から、お名は知つて居りましたのに。……と言つて、——要するに、——いまの身の上は棒飴賣です、お傍へ參つて志を遂げたいと言ふのである。年は十六だと言ふ。

先生は紅梅の中から鶯が銜んで来て、玉づさを授けたやうな時めきを感じた。勿論その手紙が薄紅の封筒と、色インキが使つてあつたためではない。今川お美根さんの名ゆゑであつた。しかし、母と言ふ妹の多根子さんに返事をした。少女が都への夢見るやうな、あこがれを非難した事、それだけでも解るが、手紙の名宛がお兄様でなくて、をち様であつたと言へば、尙よく解る。多根子さんから折返し、返事があつて、お考へ通り。よく娘に意見する事、ことに、母には内證で、わがま、を申上げた若い娘を御遠慮あそばし、その母におんかへりぶみたまひしこと、と淺からず禮がのべてあつた。

一夏、秋も過ぎ、此の冬歸省したのである。——

權九郎先生に取つては、此のくらゐ張合のある、好都合の歸省はあるまい。

考へても見るが可い、雲泣きの小僧があはれがられたばかり、——姉は土地第一の豪家の令室と成つた——いはれなき人に情誼を通ずるには、二十幾年來これだけの機會はなかつたであらう。

それは先づ妹を訪ねて、其の娘の動靜を見舞へば、すらくと道は展けるのである。

——昨日は豫定通り、手紙の處がきを辿つて、多根子さんの住家を訪ねた。場所はたとへば此處から町を中に、大川を一つ隔てた山の根の矢張り士族町であつたが、行くと、他人が住つて居て、わづかに五月ばかりの間だつたのに行方が知れない、——先生は、あゝ運命だ、と歎息したほどである。我がこれほどの念が、爾一朝にしてたやすく遂げらるべきものではない。慙う、あきらめながら、あきらめ兼ねた。——くどくは言ふまいが、抜け出した魂を採すほどつきつめて、それでも辛うじて居處を知ることが出来た。一寸見當の違つた町の綿屋とか古着屋とかの二階借をして居るのだ。と分つて、搜り當ると、綿屋は綿屋だが、ぼろ綿の打直し屋で、先生が目を据ゑて、そこを訪ねた時、「お留守。」で、再び落膽した。しかし行つた先は分つて居る。

「お二階の奥さんも、御不幸つゞきで近々に九州の方へお引越しになりますのぢやが、唯今は、據ない御親類に、手の放されぬ病人がござりますので、其處へ看病に行つてござりますよ。」先生は更に落膽した。が、綿屋の媪さんが他國ものと見て深切に、そんなに遠方ではないからと、小さな娘を其の出さきへ見せに遣つてくれた。店前に腰をかけて待つ間の心持は、さながら魂が古綿に成つて燃えたのである。

と、まったく赤くなつて俯向いたのである。
「可いわ、あなた、逢つたのね——逢つたのね、姉に。お美根さん、何にも知らないで、清しい顔をして居たでせう。」

「せめてもですよ。」

「どんな工合。」

中腰に成つて居寄つて言つた。

「先生、初戀の姉に逢つて、そして？」

「いや、何うも……」

「おつしやいよ、飴屋さん。」

「あ、ありがたい。」

「その勢ひで……さあ、お聞かせなさいつたら、私に恥かしかる事はないぢやありませんか。それだし、おなじ貧乏はして居ましてもね、いまの(落人)と(夜遁)の一件でね、姉とはまるで氣が合ひません、あちらは優しい人ですから、別に隔てはしないけれど、私が自分で身を思つて、近頃では餘りゆきかひをしませんから、先生が何を私にぶちまけたつて、姉の耳へは入りませぬ、ね、おつしやいよ、聞きたいわ。あんな芝居を見せるんぢやありませんか。」

「一言もない。」

が、飴屋の一喝で、言も元氣づいて、

「昨日、あなたに、お美根さんのお好きなものはと伺ふと、濃い茶がお好きだから、春屋の饅頭。……」

「紅白の……え、然うよ、——年増のお姫様へ貢もの、あなたの氣ぢやあ大川の龍宮へ行くくらゐな心持だつたんでせう。——さきは龍女です。その大お好きなものを教へて上げた私は魔女ね。こゝは私でなくつて、(まる)とか云ふべき處だつて……娘のおべら子さんなら言ふ處よ。其の氣焰、當るべからず。」

「いきがけに、先刻、春屋へ行つて、その紅白のを求めましたよ。」

言ひつつ思つた。権九郎先生は同時に冷汗を禁じ得ない氣障を遣つた。おなじく近所だが、當國第一と人も許した老舗の菓子屋で、紅白、精製のぎうひ饅頭は、其の店の金看板である。従つて値も貴い。……平民などは近づき難い權式なものである。

雪の夜なりし、母親の一周忌に、生前すきだつた、其の生菓子、佛壇にと、飴賣のもどりがぎうひ饅頭。

「どれほど……」

「紅いのと白いのと。」

と、びしよ／＼の莫塵の下から、うどん粉で、白い、それも冷い、餡の抽斗を抜いて出して、

「二つ。」

頭をてか／＼さした店のものが、

「何だ二つ。お前たちには毒になる、よしなく。」

と言つた。

先生は、不斷から癪に障らして居たのである。

外套ですつと入つた。……あゝその店のものは、彼處に髪も白く成つて皺びて居やがる。

「一番といふ折を出しておくれ。」

へいといふ若手代の顔を、澄まして見て、

「さきへ二つ、二つだよ、出して貰はう。他國ものだ。評判を聞いて來たが、生命がけといふ戀

人の許へ持つて行くんだ。」

此の時は、權九郎先生の氣焰、當るべからず。

「毒味もしようし、まづくつては仕方がない、食つて見る。」

店中が顔を見た。當の若手代は呆氣に取られた。

「へ、へ、とひやうもない御串戯で。」

が、慪う出られては家憲になくても、店端へ盆で持出さないわけには行かない。二三人、件の

白髪も分別らしく中へ交つて、耳打をして、苦り切つて、それから持つて來た。

「茶は何うしたい？出しながらでも可い、熱い奴を頼むぜ。」

椅子はあるのに、框へ上胡坐でむしやく／＼食つた。

「結構、では、一番の此の折へ。」

それから椅子に直つて、故とらしく、銀製のケエスを出して、のみつけないウエストミンスター
アをわざとコバルト色にふツと吹かした。旅館の貸傘のすぼめもしないで投出したのが、ぱツと
裾へ搦んでくる／＼と廻ると、すさまじく、はやてのやうなのがドツと來て、車軸の如き雨にな
つた。——今朝は、だしぬけに雷鳴して、忽ちこれと同じに霰が迸つたのであるが、此の時の
激しさは、雨流れが大道路を左右へ馬の鬘の如く颯と捌けて、波を打つて落ちた。トタンに襖端
折した、緋に白の麻の葉の絞の蹴出しを高く、紺蛇目傘を挫げさうに、姿をたわ／＼に腕らした若
い女を視て、こゝもまたゞ地方ではないと思つた、と同時に、道行く人は消えるやうに軒々へ捌か
れた。又一はやて勢ひを増すと、人影もない町に、雨の幅を中淫みに吹き撓へて、さながら立つ

波の壁面に、人を吞まうとする風雨に向つて、剩へ、目の下の坂を上りに、冬構の大根を堆く積んで、荷車を曳いて来る男を見た。車は瀧なす雨の斷崖にも押流されない。彼は莫産をたゞ胸にあて、2の字に空へ刎ねて紐のちぎれる笠を解いて咽喉にあてた。が、手で壓へないで、ぴつたりと向風の激しさに其の咽喉下に平扁く附着いた。それなり、ぐいと雨風の勢を、推戻すやうに進んで来る。突切つて、春屋の前を通るのを視ると、背中は裸體だつたのである。

権九郎先生は、卷簾とともにハタとケエスを落した。

先生は、——活花の夜稽古に、といつて、結綿のお美根さんが、買ったあとの飴賣の兒を、暗夜にひとつ蛇目傘に入れて送つた一夜の、雪の頸を思ひ、褌の紅梅を思つた。且其の時の、莫産の下のわが血汐を思つたのであつた。——あの男の意氣に劣るまい……

いまでも寒さを覺えないばかりである。

「ほかに望みはなかつたのです。——實は、おなじ故郷の友だちが一人、此も小兒の時の戀があります。邸がたのお嬢さんで、何でも知事とか、師團長とかの奥さんに成つたのです。それが大阪に移つた時、機會があつて、十五年ぶりで逢つた時、けろりとして駄辯を叩いて居て、暇乞して歸りがけに、しかも玄關で（お雪さん。）と名を呼んで、（私は貴女を戀して居ます、忘れませ

ん。）と手を握るが疾いか、靴を引擱んで遁げたと言ひます。不斷随分した、かな男ですが、一生懸命は精一杯、それ以上の事は出来ないさうです。

私はそれだけの事も望まない。——あの紅白の饅頭を、一つ、希くば紅い方をお美根さんが、お手で半分に分つて、半分食べた半分の、と念じ……念じましたよ。」

「わかりました。ほ、ほ、ですが、叶ひましたか。」

「は、」

「あのね……」

と冷したやうに笑ひながら、

「饅頭を、姉に——割つて貰つて、半分づゝ食べたんですの。」

「處が不可いんです。折角のお持せですから早速と言ふお聲がかりだから、難有いと堅唾を飲んで居ますとね、紅白の木皿を取分けて、お初穂を。——失禮ながら、お佛壇はありません、茶棚の上のお位牌へ……」

「をかした顔をしなくても可うござんす。旦那ではありません。姉は嫁入さきが分散した折に、離縁になつたのですから。」

「いや、それは蔭ながら存じて居ります。それから、私に、——まあ、お一つ、どれが可いでせ

う。——ちゃんは、と私の幼名をお呼びなすつて、紅い方を。御自分、お美根さんは白い方を。」
「ふ、ッ、御勝手になさいましたな。」
「こゝだぞ、千載の一遇と、敵の首を狙ふばかりに、お美根さんの手許を凝視めて、(私は生意氣に酒を飲みます)……と。」

「將を射るに馬を何うとやって聞いたわね。」

「學者でおいでなさる、偉い。……棒飴賣が酒を啖ふとは實は言憎かつたんですが。然う言ふと、

まあ、と不思議さうな顔をして、——そしてお酔ひなさいますか——(酔はない酒があるものです

か。)—些とも甘いものは不可ません。が、お相伴をしたうございます。半分だけ頂戴します。

貴女のお手のを、あゝ貴女のお手のを——お美根さんが、あれ、そんな失禮な事が私に……」

權九郎先生は、ぐしよゝゝの膝に兩手を張つて、頸を垂れつつ言つた。

「其ツ切です。」

「ほゝゝ、それで失望とやらをなすつて、ぼかんとして、こんな小路をうろついて、風に吹倒されたんですね。」

「さあ、風もあります。何しろ、びゆうと吹いて来て、重い番傘を、下から巻上げさうにしたんですから、悪く溝端は歩行いて居たし、足が浮いて身體がぐらぐらと廻りました。でも、がッし

り此の柳に片手を掴つて、立派に踏こたへた筈ですが、ひどい風だと、順に樹のしなつて行くのを、ふツと見ますと、向う奥の、あの、もみぢの眞紅な、あの土堀へ、裳がのつて、椿の樹の上へ顔を出し、緋縮緬の袖かと思ふ女が立つたぢやありませんか。まさか、だが、噂のある處です。ハツと思ふと、其のはすみで。」

風が呆れた。風袋を控へた大鬼は、峰の、もの見の松あたりに控へて、山嶽を鳴らし海洋を煽つて居る。こんな掃溜の場所を承はつたのは、ほんの下端の火吹竹に過ぎないから、命令もないのに、濫に人間を吹倒して、お頭からお眼玉を啖らほう、しまつた、と呼吸を殺してひそんだのである。何だ、膚の違ふお妾の怨靈に怯えたのか、馬鹿にして居る。……中ツ腹で、また一陣、たゞし加減をしながら吹きはじめた。

お多根の、鬢も袖も颯と動いた。

「私よ、……それは。」

「え。」

「そして、何、土堀の上へ立つもんですか……跨いだんだわ。」

「驚いた、あなたか、飛んでもない。」

「ほう、尤も、些とは飛ばなくつては下りられませんかね、此の橋を渡つて、病人の薬を取りに

行くのに、表からは随分廻りでしょ。……鋤か鋤で、二ツ三ツ突けば、すぐ出られるくらの穴は、壊土塀にあくんだけれど、借りるのも億劫だし、それだし、面倒だし、塀の上から一寸々々行るのよ。」

「人が、人が見たら、何うするんです。驚いたなあ。」

「めつたにないわ、人通りは。……また、誰か見て、綺麗なお妾の幽霊だと思つて、吃驚すれば、それが、今の私の身には、不思議な花なり、もみぢなりよ。……ぢやなくつて？……先生。もう、こんな、しがないさでは、そのほかには、人に見られもし、見せられもする事はないのです。誰か引くり返つて目をまはせば可い、と思つてね、實は、澄まして、あすこへ、土塀の上へ腰を掛けて居る事もあるんですの。時々は……洗髪を擲いてさ。」

「魔ものですか。私は投げ込まれたも同じだ。」

「ですから、何うにかして上げるつもりよ。」

「つもられませんか。あなたに何うにかされては大變だ。」

「取つて食はうと言ふまでも、魔ものの言ふやうにおしなさい。あの紅白の貢ものを教へてあげた。魔の女の言ふことですよ。」

「……………」

「可ござんすか。——何しろ、その溝泥ですがね、早い處は私のうちへ、塀を乗越して入つて始末をするんだけれど、それは不可ません。何うせ私たちの巢窟ですから、そんな事をする、貴方が危い。こんなのも、私のきものを、脱ぎますか、……それは貴方に着られますまい。其處です、ね、丁と可いやうにして上げます。私の言ふこと、いえ、魔女だから（まろ）（みづから）（わらは）の言ふ事を肯くんですよ。——さあ、その外套を此處へ脱ぐの。……い、羅紗ね、立派な縞子だわ、惜いこと。——帯も解いて、大丈夫。……衣ものも脱ぐの。……あら、お念佛を稱へては不可ないことよ。（あびらうんけん）も、（あぶえまりあ）も何にもなしに、唯（紅白々々）と稱へて、念じて、——然う。すいたらしい獨鈷だこと。さあよ、衣服をぞろりと……紅白、紅白……………」

「紅白、紅白。」

「然う、然う。……絆が揃つて、本場だわ、通り裏だわね、奥さんが驕りましたね。胴着、あ、感心にやけやしない。」

「此れも。」

「其れも。」

「紅白、紅白。」

「襦袢は、止さうか知ら。い、や、次手に脱がして了へ。」

「脱了へ。」

「其の時計も此方へ。——袂の堅いのは、あゝ、然う、巻蓑入れですか、紅白、紅白。」

「紅白、紅白。」

多根子は腰紐を解いた。

先生は柳に縋つた。薬罫とともに、多根子は、衣類一式を外套にくるんで、手際に、腰紐に巻

いて、づしりと提げた。

莞爾して、

「貰つてよ。」

「……………」

「あゝ、感心に青くも成らず、震へもしないわね、紅白の呪のおかげですよ。」

風は髪を拂ひ、髪を拂つた。

「先生。」

屹といった。

「まろ、みづから、わらはの言ふことをお聞きなさいよ。……奥山の孤家の鬼の棲家へ行暮れて

宿つた旅人が、一口開いた鬼に追はれて、はや生命危い時、辻堂を見て飛込んで、啜けたまへ、

おゝん神、御佛と縋りついたといふ話は御存じ？……全く、生命がけ、いまはの期に、その神様

佛様に、氣兼遠慮をして居られますか、見得も、恥も、外聞もありますか。

もう一つ教へませう。——姉はね、お美根さんはね、雲に、雪に毎晩通る、餡を賣つたお兒を

見て、銀貨をたんと持たせようの、友染の炬燵へ入れたいの、そんなことは言ひませんでした。

私はよく覚えて居ます。姉の優しさは、姉の情は、その上を越して、(あゝ、あの兒と、一所に餡

を賣つてあげたい。)と言つたんですよ。鬼が聞いても涙が出ます。——

——分りましたか。」

先生は泣いて居た。

「饅頭を分けて食べたい人が、何故、縫紋の羽織なんか着て行くんです。いまそのなりで、合羽

一枚、莫蓑を着ておいでなさい。さ、そのなりで。——よ、じれつたい。何故辻堂へ飛込みませ

ん。飛びついて、しやにむに本尊へ縋らないのです。えゝ、じれつたいね。さ、鬼が追ひますよ。

鬼が！くわッ！ 口を開けて、鬼が。」

と言ふ。

ぱつとさした紺蛇目傘は、大きき車輪に相齊しく、鐵漿つけた口を張れるに似て、殆ど裸體の

先生を、バサ、バサ、トンと突いて推すと、其勢ひでツ、と駈けた。
餘りの舉動に風が憤つた。下から轆轤をなぐつたので傘を吹かれて、よろ／＼と土塀についた。
もみぢが、颯と亂れかゝると、落葉はパツと捲上つた。雨はバラ／＼と斜に飛ぶ、唯見る權九郎
先生の、やせ腕に、脛に、ばら／＼と紅は、悪鬼の噴く炎から吹きかゝる火の粉に似つつ、あら
ず、木の葉のほりものが散つたのであつた。

時は暮春であつた——

これから言はうとする山陰道の事と、丁ど同じ季節に當るのも一寸妙に思はれる。……十六七の頃で。私は學塾の友だちが、病氣保養のため歸省するのに誘はれて、北陸道富山へ出掛けた事がある。規律の立つた公私の學校だと、そんな時ならない休暇はとれないはずだが、そこは塾といふものの氣安さに、親たちさへ承知なれば、いくらでも遊んで居られた。尤も知らぬ他國を見るのも、學問の一つだからと、そんな言ひぬけもあつて、二月ばかりその友だちの家になまけて居た。……

年久しいから、町はいま忘れたが、家は立山とひとしく名の高い、神通川に近い邸町で、土堀澤山の町を出はづれると、堤防向うは、すぐ大神通川の河原であつた。廣い河原だから、石まじりにあちこちに畑が出来て居て、そこを屋敷田圃と稱したと思ふ。

家から近い。……それに私より二つ三つ年上だつた友だちの病氣といふのが、少しをかしい、いや少しどころか大分をかしい。五六人の女の思ひが、人の妻も、娘も、妾も、下宿屋の若い女房さんまで、一齊に取つて、盡の如く惱ませる、と自から稱して、時々七轉八倒して人事不省

と成る。——皆生靈である。死んだ怨念は一つもない。一つの身體を、惚れた女の數だけに分け與へて、萬遍なく可愛がつてやればだけれども、それは出来ない相談であるとともに、苦しむ時は首も手足も五つに六つに切刻まれるばかり、絶痛ださうであつた。お醫者が弱つた。病院に、その女親、叔父などが付添つて、一月あまりも騒いだ後で、もはやさしたる容體とも思はれぬ。この上は郷里で御靜養がお宜しからう。いはゆる敬して遠ざけた形で、退院させられた次第であつた。もう、しかし痙攣も餘程鎮まつて、遠道でなければ散歩も出来たが、然ういつた神經性の病氣だから、賑やかな筋の、わけて女の緋縮緬のちらつく處は危険至極だから親たちも警戒する、また何時那の新造、那の年増が取憑くかも知れないと、そこは徹底したもので、病人自分でも避けるやうにして居たから、一所にぶら／＼あるきをする時といふと、便宜で屋敷田圃へ出掛けたものである。

處で言傳へがある。屋敷田圃は佐々成政の二の丸の跡だといふ。眞偽は知らないが、河原の眞中に小高い岡があつて、草は生え次第、松も柳も姿らしいものがない、荒れ果てて大きな塚かと思えるのを、むかしの築山のなごりだともいつた。

この岡から神通の氷際の間こそ……土地に名高い、あの、ぶらり火が燃えて、燃えつつ紫の黒髪の釣られたまゝに丈に餘ると、青い女の面影の、往來する處ださうで、月暗き夜、また雨の

そぼ降る晩など、眞夜中ともいはず、築山のいづれかに人が立つて、(早百合姫えのう、早百合姫、早百合姫。——と續けて呼ぶと、成政の手に虐殺された愛妾の怨念が、そのぶらり火と成つて顯はるゝ事、昔も今も變らないと謂つて、實際土地の人々は、この荒廢離落した一郭を、思み且つ憚つたやうである。

晝もさびしい……

私は——のちに五月雨の頃、屋敷田圃に螢狩に誘はれた。……暗夜は人の影と共に動き、螢は女の姿と共に美しく流れた、が岡のあたりは、唯雲の黒く垂下つたばかりだつたのを覺えて居る。さて、その暮春の一夕、その日は友だちの父に、客があつて、いつもより後れた夕飯の前に、二人して其處へ出た。土手を上る頃、うしろの屋敷町には、背戸、庭の若葉、樹立を透いて、ちらちらと灯が點れた。

春の日は遅々として、河原はまだ水の香も暖かに、暮切らない。櫻はもう散つたあとだが、その花の精かと思ふ薄い花片が神通の流れに落つるか、立山の空に歸るか、三つ一つ、ひらりと空を通る。……青麥が暗く菜の花が明るかつた。

爪立ち上る小道の坂——むしろ段は、こまやかな草のまゝ、崩れながら、ゆるい螺旋に繞つて、五つばかり廻ると頂に成る、尖つて居ない、矢張草のまゝ、平である。二人は其處へ立つた。

友達の方が、勿論、年も上だし、脊も高い。

夕暮の色は四方の山々、嶽々に迫つた。まだ暮切らないのに——不斷はこゝへ上ると、忽ち青い空も白い雲も目の下に翻へる神通の流が、とうとうと音ばかりして、巨身の龍は、巖に玉を攫んだ爪一つ、波の鱗の一枚をもあらはさない。河原を籠めて一帯の濃い霞——夕靄が深くかつたのである。

幕ともいへよう、その霞、その靄は流れの波の際に裾をひいて、裾が靡いて、目の透かない大きな投網にも似れば、薄墨で染めた静な几帳の趣もあつた。

北國の河原の石は、瀬に響いて鳴りながら、不思議に、そよりと吹く風もないのに、もはや峰を残して高く上り、裾はのびて、岡の道を次第に埋めようとして擴がつた。

「あの霞は、屏風を立て廻すやうに見える、……河原も畑も、菜の花もこの岡も、皆繪に成つて、屏風に吸ひ込まれるやうに見えるね。」

「吸：吸ひ込まれては大變だぞ。」

脊のひよる高い友だちは、いつも血走つたやうな目を斜に、腕まくりをして居た手を、紫かつた兵兒帯にはさんで、瘦せた肩を聳やかしながら、

「大きな聲をするなよ。」

と、たしなめるやうにいつて、

「君にも矢張りさう見えるんだな。この霞は、まつたく……土地ぢやあ屏風霞といふんだよ。秋は屏風霧さ。神通川に限つて掛るんだ。——それで、この屏風霧の立つ時は、立山の神々が大川を通つて、魚津、放生津、岩瀬の濱、有磯海か、どこか北海へ遊行する、往來の途中だといふんだぜ。……どうかすると、霞の上へ、輝く冠だの、光る簪だの、黒い頭巾だのが覗く事がある。時々その模様で、天氣がいろ／＼に變るといふんだ。——見給へ、霞は、少しづつ、上流へ動くやうだね。いま、山へ歸る處だ。神通川に動く屏風の裡の神々には、勿論、桂も、緋の袴も、女神、山媛も交つて居るとさ。」

私は思はず踏つた。

「あゝ然うだ。」

友達にはかに思ひついたやうに言つた。

「この頃、健康のためにやつて居る、深呼吸は、こんな時のためだ。僕は、こゝから、あの霞を飲まう。……不思議にこの古英雄の高い岡に記念像のやうに立つて、屏風霞に出あつたのは、僕に、自然の賜はる處だ。ねえ君、然うぢやあないか。そしてからに、清らかに純な、山媛の氣を

吸つたら、僕の體内に蟲のやうにはびこる、あまたの女の生靈は、屹と潜伏しようと思ふ。……即ち一種の血清療法だ。然うだ、確に然うだ、うむ、然うだ。」

と目を引つるし、ぶる／＼と尖つた顔をうなづかせて、そのまくり手にはめた、幅廣な黄金の腕輪、——腕輪は、女たちの生靈が時々息抜きのために其の本體に歸つて、更に男の體中に入らうとする毎に、丁ど二の腕の折かゞみから食ひ入ることを自會し得た。それを防禦する爲だといつて、強ひて親達にねだつて、蝶番でパチンとして居た。——いま其の腕を長く大川に向つて差伸べつ、黄金の色の、夕やみに早細く幽な菜の花に、きらりと競ふのを、丁と敲くと、蝶番をゆるめ状に、

「山媛……來れ!——」

と、唇を反らして高らかに呼んで、びたりと骨盤に張眩して、髪の毛を一振りふると、前屈みに目を睜り、大口を霞に張つた。

むかし奥州の炭焼が、怪しき魚の串焼に渴いて、濁の水を飲み干した勢も目のあたり。ひと含み胸を仰反らして傲然と立つて、スーッと呼吸を太く腹へ吸つた。

と見ると、張子のやうに、ポンと足が浮いて地を離れた。身體は宙に、凧の面くらつた如く踊つたが、忽ち垂直して、一丈ばかり空を切つて、人礫に成つて、ドシンと落ちた。

私も吃驚して、しりをついた。血の冷えた腰もふはくと綿に乗る、霞は近く来て、岡の頂を包んだ。

少年の色男は、霞を飲まむと欲して、霞に飲まれたのである。

血迷つた聲は、嬰兒の泣き聲のやうになつて、私は友だちの名を叫びながら、ぐるぐると螺状の坂をまどひ下りた。岡の中腹三段目の菜畠にその友だちは仰向にぐつたりして居た。口に綿を含んだのは、霞でない泡である。頂を一丈ばかり宙を乗つて泳いだ丈が、丁度、下へ——三坂めのこゝへ落ちる寸法に成つたらしい。而して、落ちる時は眞俯向けだつたが、かう仰向けに倒れたのは、途中で、とんぼ返りをしたに相違ない。

たゞ身體を揺つて、名を呼んだだけで、ウ、ウ、と呻つて息を返した。どこも怪我はしない、かすりきずもない。が、きよとんとして居た。それから、やたらに草の中を這廻つた。犬も狸も憑いたのではない。腕輪を捜したのである。

女の生霊より、いまなほ解し得ないのは、胸を張り、身を反して、霞とともに山姥を吸はうとした男が、はずみで仰向けに町の方へ倒れるのに不思議はない。反對の神通川の霞の方へ、もんどり打つて怪飛んだことである。

「お爺さん、お爺さん。」

「おい、爺さん。」

「一寸、唐突だけれども、その荷物を手傳つて持つてあげよう、出し給へ。」

七十路はもう越えて、八十にも近からう。顔には皺がないといつても可い、餘り皺で、數へやうがないのである。色は鼠色に青味を帯びて、皮剥といふ魚に似て居る。白髪は煙に似て頸窪に亂れ、兩頤に蓬に垂れて左右にほうけた、これが、痩せさらぼうた手足に較べて、人一倍その顔ばかりを大きく見せて、どこか、佛に成り済ました、矢口の頓兵衛を想はせる。一度でも芝居を知つたものは、なほ一つ、石屋の彌陀六を思ひ出すであらう。それも土地の故である。

何故といふに——

場所が京都から數へて松江まででさへトンネルの數は九十八に餘ると聞えた、山陰道の中、しかも第一の嶮所と稱へらるゝ、鎧驛を出た千仞の崖道である。この幽僻なる絶海の漁村を右に見

て、向つて左の出崎に當る御崎村とは、二つながら平家の落人が、幾百年以來、世にひそみ住むといふ僻境であるから。

老翁は、腰も背も、よぼ／＼として、兩杖を置いて居た。左手に支いたのは弓の折で、右手を縫つたのは荷の重さゆゑ助けに拾ひとつたらしい竹切であつた。紺の縫せた破風呂敷に、ぶつしりと俵ほど、ものを詰めたのを首筋に背負つた——一度鎧驛（この鎧驛に汽車の留つた時、旅客は石の火の見櫓の最上層に立つ思ひがしよう。）の崖縁の柵の根に、へたばつて居て、この荷を咽喉首をしばつて立たうとして、蟹が腹をかへしたやうに、手足をもちいたさまを思へ。——よれよれの帯に網のかゝつた大籠をぶら下げ、それに吠を結つけたが、濡れものと見えて、水が浸んで、そのためにめくら縞の素給のぢん／＼端折にした裾が、苧殻の空脛にひらつくの恰もちぎれた海松のやうに見せた。とともに、落武者のちぎれ／＼に裂け破れた草摺の状を偲せたのは言ふまでもない。その荷と荷の上へ、葱の葉の覗いた莫産巻を斜に背負つて、おまけに辨當のをせて、鰯を／＼露出しにぶら下げたばかりか、姥貝の目刺しと轉柿を苞にしたのを挿して居たのである。

よぼ／＼、てくり、で、膝をかく／＼と震はせ／＼、腰の抜けた烏のやうに、ぢん／＼端折の尾をはねて、蜈蚣が穿つたやうな、崖下がりの細道を、堅く畝りつつ、しかし、ほか／＼と五月の晴れた日を吸つて、眞青な海の方に辿つて行く。

背後を慕つて聲を掛けたのは、流行の烏打帽に、新形の洋装して、蟲類の採取箱の大形なのを肩にかけ、網をたゝんで引添つて、きり／＼と身輕に、ゲートルで脚を巻しめながら、くつは汚さず、陽炎に、艶やかに光つた青年である。

「ね、一つ持たうよ、お爺さん。」

「……………」

たとへば、ものいはぬ狸々に似て、黒い鼻の穴で、和光の塵を吸ふばかり、黙々として下りて行く。……

こ、を見よ、辨天ヶ峰の山の端の巖間をのぞく、紺碧蒼藍なる目の下の海の色を——風ぎたりといへども荒波の巖を削る勢を。

その巖に縫り、壁に添つて、一軒、二軒、或は三軒、茅屋の日と水に輝くのが、山海の氣に紫を籠めて、波の散る貝とともに玉を刻んだ景色である。崩れた籬に山吹も散残る。しぶきを立てて、颯とその小家を洗ふと見る、渚は、白く卵の花の咲くのである。

小船は見えつつ、牙を嚙んで、漁村の口を守るらしい。

漕いで居るのは木の葉もなかつた。

出岬の浦に、帆が見える。沖遠くして片帆のみ。

その時、壇の浦の戦ひに亡びて、對馬に逃げようとした平家の船の暴風のために漂はされて、その御崎に落ちたのは、門脇教盛、小宰相の局たち。この鎧村に流れたのは、上總五郎忠光、越中次郎盛綱などであると聞く。上藤また姫君のいかでその中にあらざるべき。あの、卵の花が、山吹が、あゝ花桐も遠く咲いた。唯、そのために、青年は、ふと足を揃ひ取られるやうに誘はれて——この景色を一目驛から見た、停車中の汽車の昇降臺から、うつかり下りて、老翁の後を、岨道に慕つたのである。

「ね、お爺さん。」

「……………」

「遠慮なく荷物をお出しよ。……をかくし思ふだらうけれども、僕はね、京都の醫科大學の學生なんだ。」

音調に誇を示した。

「學生もね、有名な、ある博士の家に居て、弟のやうにしてもらつて居る特待生なんだよ。」

「先生はね、非常に蝶がお好きなんだ。その採集に殆ど凝つて居られるんだね。標本室に

は全國の蝶の種類が集つて居ると言つていゝ。外國から取寄せられる蝶の繪を集めた書物なんぞ、一部で何千圓といふ位なものだよ。——僕はね、卒業も直きんだが、少し勉強を仕過ごして、頭を悪くしたもんだから、心氣を休めるために、旅行をし、かたゝく博士の意を體して、實は伯耆の大山へ蝶をとりに行つた歸途なんだ。お爺さん、あの神峻嶮怪な名山に、どんな蝶が飛ぶと思ふね。……浅葱もあれば、雪もある、薄い桃色のさへ飛ぶぢやあないか。お爺さん。」

「……………」

「娘さんがあるかね、孫かね。眞個に見せたいくらるだよ。お婆さんだつて喜ぶよ。それは綺麗で神々しいから。」

さうだく、綺麗で神々しいといへば、僕は何だか、お爺さんが——失禮したら御免よ。傳統を引いた勇士で、忠臣で、それで、美しいお嬢さん、むしろ姫君に……だね、身を以て仕へて居る人のやうに思はれてならないんだ。たとへば、その時代の立ものであつた、上總五郎忠光、越中の前司……」

青年はふと陽炎の裡に思つた。

——越中の前司、来る敵を、なほ目も放たず、まぼりければ、猪俣あつばね、今一度、くまんするものを、人見近づかば、さりととも、よも落合ぬ事あらじと、おもひて、相待

處に、人見も次第に近づいたり、猪俣力足をふんで、つゝ立あがり、思ひもかけぬ、越中の前司が、鎧の胸板、はつとついて、後なる澤田へ、のけにつきたふす、大の男の重鎧着たりけるが、蝶の羽を、ひろげたるがごとくにて、おきんくくと、しける處を、——待て、博士に語つて、記念のために、大山にて獲たる鎧蝶の一種大なるを、前司蝶か、盛俊蝶と呼ぶとしよう。箱の中へ心を遣つて、前司も次郎もごつたにした、不謹慎に、思ひ上りつ、なほ憧憬の言葉を續けた。

「その人たちの有さまを、いま見るやうに思ふんだよ、お爺さん、お爺さんは、次の驛の久谷から乗つたんだね。」

然り、桃觀峠の絶壁に構へた、あとのその久谷の驛は、鎧の停車場と雙方に、辨天ヶ峰、荒神ヶ嶽、兩山に相對して切立ての臺を立てて、その間の溪谷に、恰も釣り橋の狀をなして大陸橋を架けて居る。

丹波路、但馬、また伯耆路、前夜をいづれかの湯の宿、あるひは旅館に宿したるものには、旅籠屋の男、女は、好意を以て、翌日の旅の奇勝を語るであらう。即ち餘部の陸橋である。

汽車はゆるみなく馳るから、心なくして過ぐる目には、下に水なき橋の、たゞ高く聳えたるガアドを渡るとのみ思ふであらう。一たび窓によつて差のぞくや、忽ち目くるめき、舌かわき、膝わな、く。わが乗る車の下に、深い谷間なる、その餘部の蔓の狀を、蟻まる大蛇の五彩の鱗の如く見て、橋は七色の虹を渡る。煙は白き雲と成つて、さかさまに轍の腹を這ふのであるから、人は飛行機によらずして居ながら青天を飛ぶのである、わな、く膝、くるめく目に、御崎は怪しき魚の如く波を碎き、鎧は美しき鳥に似て、岩角に翼をのぶる。

「あの久谷驛で、汽車がもう出ようとする間際に、十六七の少年の驛夫が、お爺さんの背負つて居る、その大きな風呂敷包みを、もろに引立てて、ぐわしやりと昇降口へ下して突込んだつね。そのあとへ——よろしくと兩杖でるざるやうにして、お爺さんが縋りついた。引する足の、腰を押して、急いで汽車へ押込みながら、(大丈夫か、お爺さん。)少年が聲を掛けると、その深切を嬉しさう、お爺さんは、ニコリとして、ものを言つたね、……言ひましたね、……お爺さん。」

「……………」
が、無論嘘ではないのである。

「腹を立てては不可ないがね——僕は違つた座席から見、あゝ、中風症の老人が一人旅。するものも、させるものも、無法だと思つたつけ。——ふと、この變の傳説を思つて、お爺さんの風采が目につくと、あゝ、平家の一黨である。美しい姫君にかしづくのであらう。優しい御臺をいたはるのであらう、娘と、孫を、玉の如く花の如く愛するのであらう——鎧村の人かも知れない。」

……たゞそれは、ちよつとの思ひつきに過ぎなかつたんだけれど、鎧へ着いて、昇降口へ出て、この絶景を見た、目の前の柵の根から、のっそりお爺さんが立上つて、お、と思ふうちに、よろよるとこの崖道へかゝつた時は、空な思ひつきが、眞實になつて、確にこれは、姫君、御臺、嫁、孫、娘と信じたんだ。——歸つて、お爺さんが、その辛勞苦力した、その買ものを分けて、嬉しく楽しく話すのだらう。うらやましい。あやかりたい。お爺さん、その勞を授け給へ。そしてその樂しみを分けたまへ。かしづく人、いたはる人、愛する人のために、この僻境の一つ家で、粉骨碎身する嬉しさは、法のために、道のために、菩薩のために、難行苦行するよりも尙ほありがたい。——それにしても、お爺さんをいたはつた、あの驛夫は美少年だつたね。僕は妬ける……嫉ましい。……僕は醫學生だ。連れて、ともなつてくれ給へ。——ある時は賣りにも來よう、めまひ、立ちくらみ、腹胸のいたみ……賣藥の效能書よりは、もつとむづかしい煩はしい病氣にも立派に役に立つつもりだ。お爺さん。」

かくても返事なき我耳を、醫學生は自ら疑つて、一息して立停つた。幾千の道を來りけん、日はいまだ斜ならねど、巖は潮の香にや、かげつた。道の纏れたかげろふの末に、山吹の垣根に、あの卵の花を袖にして、緋のつゝじの彷彿とした

夢のやうな姿を見た。——學校に避ふ娘は、こゝでも榜ははくだらうに。

峰は高い。浪の音は尙ほ響かずに、花桐の香の脈を傳つて、芬と血に通つた時である。

「お爺さん、醫者がいらすば下男に代る……水を汲まう、斷崖を攀て。……血を滴らして、薪割もしよう、その葱を洗はう。僕の、姓、姓を西川といふのも、この變の川に名がある。過去の因縁であらうも知れない、一生を村に過しても可い、お爺さん。」

と、自己陶醉に感傷して、聲涙まさに到りつつ、
「ともなつて、くれ給へ。お爺さん、連れてつてくれ。」

折から急な坂に爪立つて、うしろから伸ばす手の、その襤褸の袂に届かうとしたと、同時であつた。

屹と振向いた老翁の大なる青い顔に、きらりと一雙の目が光つた。

「うるせい。」

ひげ髪が颯と揺れると、竹杖を片手に、衝と空ざまに高く指した。

醫學生は、もんどり打つて、腰から宙へ、鞠の如く縮んで飛んだ。その手足の、くるくると伸びた時、窪地一面、植棄ての小さな菜畑の中へ眞俯向けに、のめずつて落ちたのである。

雜樹の葉の茂暗く、心も、濛々とした樹々の根と、竹藪の梢を二重に隔てた、下の斷崖から、

我胸わがむねに響ひびいて聞きえた。……

うら若い女わかをんなの聲こゑで、

「ぢいやは……強つよいこと。」

「へ、へ、へ、人間じんげんは蝶々てふくより、こなし易ようがんですの。」

怨靈借用

婦人は、座の傍に人氣のまるでない時、ひとりでは按摩を取らないが可いと、昔氣質の誰でも然う云ふ。上は然までもない。あの下の事を言ふのである。聞では別段に注意を要するだらう。以前は影繪、うつし繪などでは、巫山戯たその光景を見せたさうで。——御新姐さん、……奥さま。……さ、お横に、と此から腰を揉むのだが、横にもすれば、俯向にもする、一つくるりと返して、ふはりと柔く又横にもしよう。水々しい魚は、眞綿、羽二重の組に寝て、術者はまな箸を持たない料理人である。衣を透して、肉を揉み、筋を萎すのであるから恍惚と身うちが溶ける。ついたしなみも粗末に成つて、下じめも解けか、れば、帯も緩くなる。きちんとして居てさへ雑と此の趣。……遊山旅籠、温泉宿などで寝衣、浴衣に、扱帯、伊達巻一つの時の様子は、略……お互に、しなくつても可いが想像が出来る。膚を左右に揉む拍子に、所謂青練も溢れようし、緋縮緬も友染も敷いて落ちよう。按摩をされる方は、對手を盲にして居る。其處に姿の油断がある。足くびの時などは、一應は職業行儀に心得て、太腰から曲げて引上げるのに、すんなりと衣服の

襦を巻いて包むが、療治をするうちには雙方の氣のたるみから、踵を摺下つて襦が波のやうにはらりと落ちると、包ましい膝のあたりから、白い踵が、空にふらふらとなり、しなくとして、按摩の手の裡に絲の亂るゝが如くに縫れて、艶に媚かしい上搔、下搔、たゞ卍巴に降る雪の中を倒に歩行く風情に成る。バツタリ眞暗に成つて、……影繪は消えたものだからである。

——聞くにつけても、たしなむべきであらうと思ふ。——

が、これから話す、わが下町娘のお桂ちゃん——いまは嫁して、河崎夫人であるのに、此の行爲、此の状があつたと言ふのでは決してない。

問題に觸れるのは、お桂ちゃんの母親で、もう一昨年頃故人の數に入つたが、照降町の背負商ひから、やがて宗右衛門町の角地面に問屋と成るまで、その大島屋の身代八分は、其の人の働きだつたと言ふ。體量も二十一貫づつしりとした太腹で、女長兵衛と稱へられた。——末娘で可愛いお桂ちゃんに、小遣の出振りが面白い……小買ものや、芝居へ出かけに、お母さんが店頭に、多人數立働く小僧中僧若衆たちに、氣は配つても見ないふりで、くゝり願の福々しいのに、圓々とした兩腕の頬杖で、薄眼りをして居る、一段高い帳場の前へ、故と澄ました顔して、(お母さん、少しばかり。)黙つて金箱から、づらりと摺出して渡すのが、掌が大きく、慈愛が餘るから、……瘦ぎすずで華奢なお桂ちゃんの片手では受切れない、兩の掌に積んで、銀貨の小粒なのは指から

ざら／＼と溢れたと言ふ。……亡きあとでも、その常用だつた粗末な手ぶんの中に、なほざりに一寸半紙に包んで、(桂坊へ)といけぞんざいに書いたものを開けると、水晶の浄土珠數一聯、とつて十九のまだ嫁入前の娘に、と傍で思つたのは大違ひ、粒の揃つた百幾顆の、皆眞珠であつた。

姉娘に養子が出来て、養子の魂を見取つてからは、いきぬきに、時々伊豆の湯治に出掛けた。

——この温泉旅館の井菊屋と云ふのが定宿で、十幾年來、馴染も深く、殆ど親類づき合ひに成つて居る。その都度祕藏娘のお桂さんの結綿島田に、緋鹿子、匹田、絞の切、色の白い細面、目に張のある、眉の優しい、純下町風俗のを、山が育てた白百合の精のやうに、袖に包んで居たのは言ふまでもない。……

「……其の大島屋の先の大きいおかみさんが、ごふびんに思召しましてな。……はい、え、右の小僧按摩を——小一と申したでござりますが、本名で、まだ市名でも、齋號でもござりません、……見た處が餘り小いので、お客様方には十六と申す事に、師匠も言ひきけてはありますし、當人も、左様に人様には申して居りましたが、此の川の下流の釜ヶ淵——いえ、もし、渡月橋で見えます白糸の瀧の下……あれではござりません。もつとづつと下流に成ります。——その釜ヶ淵へ身を投げました時、——小一は二十で、従つて色氣があつたでござりますよ。」

「二十にならなくつたつて、色氣の方は大丈夫あるよ。——私が手本だ。」

と言つて、肩を揉ませながら、快活に笑つたのは、川崎欣七郎、お桂ちゃんのお夫で、高等商業出の秀才で、銀行員のいゝ處、年は四十だが若々しい、年齢に些と相違はあるが、此の縁組に申分はない。次の室つき井菊屋の奥、香都良川添の十疊に、もう床を並べて、膝まで沈むばかりの羽根毛蒲團に、ふつくりと、たんぜんで寛いだ。……

寢床を這つて、窓下の紫檀の机に、うしろ向きで、紺地に茶の縞お召の袷羽織を、撫肩にぞろりと掛けて、道中の髪を解放し、あすあたりは髪結が来ようと言ふ櫛巻が、房りしながら、清らかな耳許に簪の珊瑚が薄色に透過る。……男を知つて二十四の、きちの雪が一層あくが抜けて色が白い。眉が意氣で、口許に情が籠つて、きり、としながら、一寸お轉婆に片袂の緋の紋縮緬の崩れた媚かしさは、田舎源氏の——名も通ふ——桂樹と云ふ風がある。

お桂夫人は知らぬ顔して、間違つて、愛讀する……泉の作で「山吹」と云ふ、まがひものの戯曲を、軽い頬杖で讀んで居た。

「御意で、へ、へ、へ、」

と唯今の御前のおほせに、恐入つた體して、肩からすり下つて、背中でお叩頭をして、ボンと浮上つたやうに顔を擡げて、鼻をひこ／＼と行つた。この謙齋坊さんは、座敷は暖かだし、精を

張つて、つかまつたから、十月の末だと云ふのに、むき身絞の襦袢、大肌腕に成つて居て、綿八丈の襟の左右へ開けた毛だらけの胸の下から、紐のついた大蝦蟇口を溢出させて、揉んで居る。「で、旦那、身投げがござりましてから、其の釜ヶ淵……これは唯底が深いと云ふだけの事でありませうで、以來其處を、提灯ヶ淵——これは死にます時に、小一が冥途を照しますつもりか、持つて居りましたので、それに、夕顔ヶ淵……また此は、その小按摩に様子が似ました處から。」

「いや、其は大したものだな。」

くわ、とたゞ口を開けて、横向きに、聲は出さずに按摩が笑つて、

「處が、もし、顔が黄色膨れの頭でつかち、えらい出額で。」

「それぢやあ、夕顔の方で迷惑だらう。」

「御意で。」

と又一つ、すり下りさまに叩頭をして、

「でござりますから瓢箪淵とでもいたした方が可からうかとも申します。小一の顔色が青瓢箪を俯向けにして、底を一つ叩いたやうな鹽梅と、わしども家内なども申しますので、はい、背が低くつて小兒同然、それで、時々相修業に肩につかませた事もござりますが、手足は大人なみに出来て居ります。大な日和下駄の傾いだのを引摺つて、——まだ内弟子の小僧ゆる、身分ではご

ざりませんから羽織も着ませず……唯今頃はな、つんつるてんの、裾のまき上つた手織綿か何かで陰氣な顔を、がつくりくと、振りく、(びい、ぶう。)と笛を吹いて、杖を突張つて流して歩きますと、御存じのお客様は、あの小按摩の通る時は、何うやら毛の薄い頭の上を、不具の烏が一羽、お寺の山から出て附いて行くと申されましたもので。——心掛の可い、勉強家で、まあ、此の湯治場は、お庇様とお出入さきで稼ぎがつかます。流さずともでござりますが、何も修業と申して、朝も早くから、その、(びい、ぶう。)と、橋を渡りましたり、路地を抜けましたり……それが死にましてからはな、川向うの藝妓屋道に、どんな三味線が聞えましても、お客様がたは、按摩の笛と云ふものをお聞きになりますまいでござります。何の又聞えずともではござりますがな。——へい、いえ、いえ其のま、でお宜しう……はい。

然うした貴方様、勉強家でござりました癖に、さて、此が療治に掛りますと、希代にのべつ、坐睡をするでござります。古來、姑の目ざといのと、按摩の坐睡は、遠島ものだといいたしたくらゐなもので。」

とばちくばちと指を弾いて、

「わしども覚えがござります。修業中小僧のうちは、また其の睡い事が、大蛇を枕でござりますて。けれども小一のははげしいので……お客様の肩へつかまると、——すぐに、其こくりこ

くり。……先づ、そのために生命を果しましたやうな次第でござりますが。」

「何かい、歩きながら、川へ落こちでもしたのかい。」

「いえ、其は、身投で。」

「あ、然うだ、——此方が坐睡をしやすいか。おや、客から叱言が出て、親方……其の師匠にでも叱られたためなんだな。」

「……不漸の事で……師匠も更めて叱言を云ふがものはござりません。それに、晩も夜中も、坐睡つてばかり居ると申すでもござりませんでな。」

「そりや然うだらう——朝から坐睡つて居るんでは、半分死んでゐるのも同じだ。」

と欣七郎は笑つて言つた。

「春秋の潮時でもござりませうか。——大島屋の大きいお上が、半月と、一月、ブツと御逗留の事も毎度ありました、その御逗留中と云ふと、小一の、持病の坐睡が又激しく起ります。」

「ふ——」

と云つて、欣七郎はお桂ちゃんの雪の頸許に、擦つたさうな目を遣つた。が、夫人は振向きもしなかつた。

「ために、主な出入場の、御當家では、方々のお客さんから、叱言が出ます。かれこれ、大島屋

さんのお耳にも入りますな、おかみさんが、可哀相な盲小僧だ。……それ、十六七とばかり御承知で……肥満つて身體が大いから、小按摩一人肩の上で寝た處で、蟻螂が留まつたほどにも思はない。冥利として、たゞで、お錢は遣れないから、肩で船を漕いで居ると、毎晩のやうに、お慈悲で療治をおさせになりました。……處が旦那。」

と暗い方へ、黒い口を開けて、一息して、

「何うも意固地な……いえ、不思議なもので、其の時だけは小按摩が決して坐睡をいたさないでござります。」

「その、おかみさんには電氣でもあつたのかな。」

「へ、へ、飛んでもない。おかみさんのお傍には、いつも、それはく綺麗な、お美しいお嬢さんが、大好きな、小説本を讀んで居るのでござります。」

「娘ツ子が讀むんぢやあ、どうせ碌な小説ぢやあるまいし、碌な娘ではないのだらう。」

「勿體ない。——香都良川には月がある、天城山には雪が降る、井菊の霞に花が咲く、と土地ではやしましたほどのお嬢さんでござりますよ。」

「按摩さん、按摩さん。」

と欣七郎が聲を刻んだ。

「は、」

「きみも土地ぢや古顔だと云ふが。ぢやあ、その座敷へも呼ばれただらうし、療治もしただらうと思ふが、どうだね。」

「は、それが、つい、おうはさばかり伺ひまして、お療治はいたしません、と申すが、此屋様なり、そのお座敷は、手前同業の正齋と申す……河豚のやうではござりますが、腹に一向の毒のない男が持分に承つて居りましたので、此の正齋が、右の小一の師匠なのでござりまして。」

「成程、しかし狭い土地だ。そんなに逗留をして居るうちには、きみなんか、その娘ツ子なり、おかみさんを、途中で見掛けた——いや、これは失禮した、見えなかつたね。」

「旦那、口幅つたうはござりますが、目で見ますより聞く方が確でござります。それに、それお通りだなどと、途中で皆がひそく遣ります處へ出會ひますと、芬とな、何とも申されません句が。……温泉から上りまして、梅の花を其……嗅ぎますやうで、はい。」

座には今、その白梅よりや、淡青い、春の李の薫がしたらう。

うつかり、ふんと嗅いで、

「不躰け。」

と思はずしやべつた。

「其の香の好さと申したら、通りすがりの私どもさへ、寐しなに衣ものを着換へましてからも、身うちが、ほんのりと爽いで、一晚、極樂天上の夢を見たでござります。一つ部屋で、お傍にでも居ましたら、もう、それだけで、生命も惜うはござりますまい。況して、人間のしひなでも、そこは血氣の若い奴でござります。死ぬのは本望でござりましたらうが、もし、それや、これやで、釜ヶ淵へ押ばまつたでござりますよ。」

お桂の一寸振返つた目と合つて、欣七郎は肩越に按摩を見た。

「ぢやあ、なにか其の娘さんに、かゝり合ひでもあつたのかね。」

二

「飛んだ事を、お嬢さんは何も御存じではござりません。唯、死にます晩の、其の提灯の火を、お手づから點けて遣はされただけでござります。」

お桂は其のまゝ机に凭つた、袖が直つて、八口が美しい。

「其の晩も、小一按摩が、御當家へ、こつつりくと入りまして、お帳場へ、精靈棚からぶら下りましたやうに。——尤ももう時雨の頃で——その瓢箪頭を俯向けますと、(おい、霞の五番さんぢや、今夜御療治はないぞ。)と、こちらに、年久しい、半助と云ふ、送迎なり、宿引なり、手代

なり、……頑固で、それで一寸剽軽な、御存じかも知れません。威勢のいゝ、」

「あれだね。」

と欣七郎が云ふと、お桂は黙つて頷いた。

「半助が然う申すと、びしやくと青菜に鹽に成りましたつけが、(それでは外様を伺ひます。)

(あゝ、行つて來な。内ぢやお座敷を廻らせないんだが、お前の事だ。)尤も、(霞の五番さん)大島屋さんのお上さんの他には、好んで揉ませ人はござりません。——何處を何う廻りましたか、宵に來た奴が十時過ぎ、船を漕いだものが故郷へ立歸ります時分に、ぼかんと帳場へ戻りまして、畏つて、で、歸りがけに、(今夜は闇でございます、提灯を一つ。)と申したさうで、(おい、來た。)村の衆が出入りの便宜同様に、氣輕に何心なく出したげで。——此處がその、少々變な鹽梅なのでござりまして、先が盲だとも、盲だからとも、乃至、目あきでないとも、そんな事は一向心着かず……それには、ひけ頃で帳場も一寸たついて居たでもござりませうか。其の提灯に火を點して遣らなかつたさうでござりますな。——後での話でござりますが。」

「おやく、しかし、ありさうな事だ。」

「はい、その提灯を霞の五番へ持つて參じました、小按摩が、逆戻りに。——(お桂様。)うちのものは、皆お心安だてにお名を申して呼んで居ります。其處は御大家でも、お商人の難有さで、

此がお邸づら……」

嚏の出損つた顔をしたが、半間に手を留めて、腸の如く手拭を手繰り出して、蝦臺口の紐に搦むので、よぢつて俯むけに額を拭いた。

意味は推するに難くない。

欣七郎は、金口を點けながら、

「構はない、俺も素町人だ。」

「いえ、然う云ふわけではござりませんが。——其のお桂様に、(暗闇の心細さに、提灯を借りましたけれど、盲に何が見えると、帳場で笑ひつけて火を貸しません、何うぞお慈悲……お情に。)と、それ、不具根性、僻んだ事を申します。お上さんは、最うお床で、恚う目をばつちりと見とござつたさうにござります。處で、お娘ごは何の氣なしに點けてお遣りになりました。——さて、霞から、すつと參れば玄關へ出られますものを、何う云ふものか、廊下々々を大廻りをして、此の……花から雪を掛けて千鳥に縫つて出ましたさうで。……井菊屋のしるしはござりますが、陰氣に灯して、暗い廊下を、黄色な鼠の霜げた小按摩が、影のやうに通ります。此の提灯が、やがて、其の夜中に、釜ヶ淵の上、土手の夜泣松の枝にさがつて、小一は淵へ、巖の上に革緒の足駄ばかり、と聞いて、お一方病人が出來ました。……」

「あゝ、娘さんかね。」

「それは……いえ、お優しいお嬢様の事でござります……親しく出入をしたものが、身を投げたとお聞きなされれば、可哀相——とは、……それはさ、思召したでござりませうが、何の義理時宜に、お煩ひなさつて可いものでござります。病みつきましたのは、雪にござつた、獨身の御老體で……」

京阪地の方ださうで、長逗留でござりました。——カチリ、

と言つた。按摩には冴えた音。

「カチリ、へへツへツ。」

とペソを搔いた顔をする。

欣七郎は引入れられて、

「カチリ?……何うしたい。」

「お簪が抜けて落ちました音で。」

「簪が?……一寸。」

名は呼びかねつつ注意する。

「いゝえ。」

婀娜な夫人が言つた。

「え、滅相な……奥方様、唯今ではござりません。その當時の事で……上方のお客が宵寐が覺めて、退屈さにもう一風呂と、お出かけなさる障子際へ、すら〜と廊下を通つて、大島屋のお桂様が。——と申すは、唯今の花、此のお座敷、或はお隣に當りませうか。お娘ごには叔父ごに成らつしやる、富澤町さんと申して兩國の質屋の旦那が、一寸異なる寸法のわかい御婦人と御樂みで、大いお上さんは、苦い顔をしてござつたれど、其處は、長唄のお稽古ともだちか何かで、お桂様は、その若いのと知合でおいでなさる。そこへ——こゝへでござります……貴女のお座敷は、その時は別棟、向うの霞で。……此方へ遊びに見えました。もし、そのお歸りがけなのでござりますて。」

上方の御老體が、それなり開けると出會頭に成ります。出口が次の間で、もう床の入りました座敷の襖は暗し、又雪と申すのが御存じの通り、當館切つての北國で、廊下も、それは怪しからず陰氣ださうでござりますので、わしどもでも手さぐりでヒヤリとします。暗い處を不意に開けては、若いお娘ご、吃驚もなさらうと、ふと遠慮して立たせえた。……お通りすがりが、何とも申されぬい、匂で、その香をたよりに、いきなり、横合の暗がりから、お白い頸へ嚙りついたものがござります。……」

「え、」

お桂もぞツとしたやうに振向いて肩をすぼめた。

「わしどもが、此方へ伺ひます途中でも、もの好きなのは、見て来た、見に行くと、高聲で往來が騒いで居ました。」

謙齋の此の話の緒も、はじめは、その事からはじまつた。

それ、谿川の瀬、池水の調べに通つて、チャンチキ、チャンチキ、鉦入り、笛の音、太鼓の響が、流れつ、堰かれつ、星の静な夜に、波を打つて、手に取る如く聞えよう。

實は、此の温泉の村に、新に町制が敷かれたのと、山手に遊園地が出来たのと、名所に石の橋が竣成したのと、橋の欄干に、花電燈が點いたのと、従つて景氣が可いのと、儲るのと、唯その一つさへ祭の太鼓は賑ふべき處に、繁昌が合奏を演るのであるから、鉦は鳴す、笛は吹く、續いて踊らずには居られない。

何年めかに一度と云ふ書入れ日がまた快晴した。

晝は屋臺が廻つて、この玄關前へも練込んで来て、藝妓連は地に並ぶ、雛妓たちに、町の小女が交つて、一樣の花笠で、湯の花踊と云ふのを演つた。屋臺のまがきに、藤、菖蒲、牡丹の造り

花は飾つたが、其の紅紫の色を奪つて目立つたのは、膚脱の緋より、帯の萌葱と、伊達巻の鬱金縮緬で。揃つて、むら兀の白粉が上氣して、日向で、むら／＼と手足を動かす形は、茶晶であからさまに狐が踊つた。チャンチキ、チャンチキ、田舎の小春の長閑さよ。

客は一統、女中たち男衆まで、擧つて式臺に立つたのが、左右に分れて、妙に隅を取つて、吹溜りのやうに重り合ふ。眞中へ拭込んだ大廊下が通つて、奥に、霞へ架けた反橋が庭のみみぢに燃えた。池の水の青く澄んだのに、葉ざしの日加減で、薄藍に、朧の銀に、青い金に、鯉の影が悠然と浮いて泳いで、見ぶつに交つた、ひとりお桂さんの姿を、肩を、褰を、帯腰を、彩つたものであつた。

此の夫婦は——新婚旅行の意味でなく——四五年來、久しぶりに——一昨日温泉へ着いたばかりだが、既に一週間も以前から、今日の祝日の次第、獻立書が、處々、紅の二重圈點つきの比羅に成つて、辻々、塀、大寺の門、橋の欄干に顯はれて、藝妓の屋臺囃子とともに、最も注意を引いたのは、假裝行列の催であつた。有志と、二重圈點、かさねて、飛入勝手次第として、祝賀委員が、審議の上、その假裝の優秀なるものには、三等まで賞金美景を呈すとしたのに、讀者も更めて御注意を願ひたい。

だから、踊屋臺の引いて歸る囃子の音に誘はれて、お桂が欣七郎とともに町に出た時は、橋の

「可厭な、あひかはらずね……」
 お桂さんが引返さうとした時、歩手前の店のは、白張の暖簾のやうな汚れた天蓋から、捌髪の垂れ下つた中に、藍色の片頬に、薄目を開けて、片目で、置据ゑの囃子屋臺を覗くやうに見て居たし、先隣なのは、釣上げた古行燈の破から、穴へ入らうとする蝮の尾のやうに、かもじの尖ば

上で辨慶に出會ひ、豆腐屋から出る緋緘の武者を見た。床屋の店に立掛つたのは五人男の随一人、だてにさした尺八に、雁がねと札を着けた。犬だつて浮かれて居る。石垣下には、鶯が、ぐわいぐわいと鳴立てた、が、それは此の川に多い鶴鴒が、假装したものではない。
 泰西の夜會の例に見ても、由來假装は夜のものであるらしい。委員と名のる、もの識が、そんな事は心得た。行列は午後五時よりと、比羅に認めてある。晝はかくれて、不思議な星の如く、颯と夜の幕を切つて顯れる筈の處を、それらの英雄俠客は、髀肉の敷に堪へなかつたに相違ない。かと思へば、桶屋の息子の、竹を削つて大榭形に組みながら、せつせと小僧に手傳はして、しきりに紙を貼つて居るのがある。通りがかりの馬方と問答する。「おいらは留めようと思つたが、此の景氣ぢやあ、とても引込んで居られない。」「はあ、何に化けるね。」「凧だ……黙つて居てくれよ。おいらが身體をそのまゝ、大凧に張つて飛歩行くんた。兩方の耳にうなりをつけるぜ。」「魂消たの、一等賞づらえ。」「黙つててくんろよ。」「馬がヒーンと嘶いた。此の馬が迷惑した。のそりのそりと歩行出すと、はじめ、出會つたのは緋緘の武者で、續いて出たのは雁がね、飛んで来たのは辨慶で、争つて騎らうとする。揉みに揉んで、太刀と長刀が左右へ開いて、尺八が馬上に跳返つた。そのかはり横田圃へ振落された。
 唯此のくらの間だつたが——山の根に演藝館、花見座の旗を、今日はわけて、山鳥の如く囀

した、町の角の藝妓屋の前に、生刻の囃子屋臺が、大な蟲籠の如くに、紅白の幕のまゝ、寂寞として据つて、踊子の影もない。はやく町中、一練は練廻つて剩す處がなかつたほど、温泉の町は、さて狭いのであつた。やがて、新造の石橋で列を造つて、町を巡りました後では、揃つて此の演藝館へ練込んで、乃ち放樂の亂舞となるべき、假装行列を待顔に、掃清められた狀の此のあたりは、軒提灯のつらなつた中に、却つて不斷より寂しかつた。
 峰の落葉が、屋根越に——

日蔭の冷い細流を、軒に流して、丁ど此の辻の向角に、二軒並んで、赤毛氈に、よごれ蒲團を繼はぎしたやうな射的店がある。達磨落し、バットの狙撃はつい通りだが、二軒とも、揃つて屋根裏に釣つた幽霊がある。彈丸が當ると、ガタリざら／＼と蛇腹に伸びて、天井から倒に、いづれも女の幽霊が、ぬけ上つた青い額と、縹色の細い顔を、ひよろ／＼毛から突出して、背筋を中反りに蜘蛛のやうな手とともに、ぶらりと下る仕掛けである。
 「可厭な、あひかはらずね……」
 お桂さんが引返さうとした時、歩手前の店のは、白張の暖簾のやうな汚れた天蓋から、捌髪の垂れ下つた中に、藍色の片頬に、薄目を開けて、片目で、置据ゑの囃子屋臺を覗くやうに見て居たし、先隣なのは、釣上げた古行燈の破から、穴へ入らうとする蝮の尾のやうに、かもじの尖ば

かりが、ぶら／＼と下つて居た。

歸りがけには、武藏坊も、緋臈も、雁がねも、一所に床屋の店に見た。が、雁がねの臆面なく白粉を塗りつつ居たのは言ふまでもなからう。

——小一按摩のちびな形が、現に、夜泣松の枝の下へ、假装の一個として顯れて居る——
按摩の謙齋が、療治しつつ欣七郎に話したのは——其の夜、食後の事なのであつた。

三

「半助さん、半助さん。」

すらくと、井菊の廣い帳場の障子へ、姿を見せたのはお桂さんである。

あの奥の、花の座敷から來た途中は——此家での北國だと言ふ——雪の廊下を通つた事は言ふまでもない。

カチリ……

ハツと手を舉げて、珊瑚の六分珠をおさへながら、思はず膠についたやうに、足首からむすむすして、爪立つたなり小棲を取つて上げたのは、謙齋の話の舌とともに、蛞蝓のあとを踏んだからで、スリッパを脱ぎ放しに釘でつけて、身ぶるひをして衝と抜いた。湯殿から蒸しかゝる暖い

霧も、其處で、さつと肩に消えて、池の欄干を傳ふ、緋鯉の鱗のこぼれかゝる眞白な足袋はだしは、素足より尙ほ冷い。で……霞へ渡る反橋を視れば、そこへ島田に結つた初々しい魂が、我身を抜けて、うしろ向きに、氣もそゞろに走る影がして、ソツと肩をすぼめたなりに、兩袖を合せつつ呼んだのである。

「半助さん……」こゝで踊屋臺を視た、晝の姿は、鯉を遊ばせた薄もみぢのさゞ波であつた。いまは、その跡を慕つて大鯰が池から雫をひたくと引いて襲ふ氣勢がある。

謙齋の話は、あれから尙ほ續いて、小一の顯はれた夜泣松だが、土地の名所の一つとして、繪葉書で賣るのは場所が違ふ。それは港街道の路傍の小山の上に枝ぶりの佳いを見立てたので。——眞の夜泣松は、汽車から來る客たちの此の町へ入る本道に、古い石橋の際に土をあはれに装つて、石地藏が、苔蒸し、且つ碎けて十三體。それ／＼に、檜、線香を手向けたのがあつて、十三塚と云ふ……一揆の頭目でもなし、戦死をした勇士でもない。きいても氣の滅入る事は、むかし大饑饉の年、近郷から、湯の煙を慕つて、山谷を這出て來た老若男女の、救はれずに、菜色して餓死した骨を拾ひ集めて葬つたので。その塚に沿つた松なればこそ、夜泣松と言ふのである。——晝でも泣く。——假装した小按摩の妄念は、其の枝下、十三地藏とは、間に水車の野川が横

に流れて石橋の下へ落ちて、香都良川へ流込む水筋を、一つ跨いだ處に、黄昏から、もう提灯を釣して、裾も濡れさうに、ぐしやりと踞んで居る。

今度出来た、谷川に架けた新石橋は、丁ど地藏の斜向ひ。でその橋向うの大旅館の庭から、假装は約束の如く勢揃をして、温泉の町へ入つたが——然う云つては如何だけれど、饑饉年の記念だから、行列が通るのに、四角な行燈も肩を圓くして、地藏前を半輪によけつつ通つた。……其のあとへ、人魂が一つ離れたやうに、提灯の松の下、小按摩の妄念は、列の中へ加はらずに孤影、熒然として残つて居る。……

ぬしは分らない、假装であるから。いづれ有志の一人と、假装なままで四五人も誘つたが、一寸手を引張つても、いやその手を引くのが不気味なほど、正のものの身投げ按摩で、びくとも動かないで居る。……と言ふのであつた。

——此を云つた謙齋は、しかし肝心な事を言ひわすれた、あとで分つたが、誘ふにも、同行を促すにも、なかまが交も聲を掛けたのに、小按摩は、おくびほども口を利かない。「びい、ぶう。」舌のかはりに笛を。「びいぶう」と唯笛を吹いた。——

半ば聞ずてにして、すつと袖の香とともに、花の座敷を抜けた夫人は、何よりも先に其の眞偽

のほどを、——そんな事は遊びすきだし一番明い——半助に、あらためて聞かうとした。懸念に處する、此がお柱の此の場合の第一の手段であつたが。……

居ない。

「おや、居ないの。」

一層袖口を引いて襟冷く、少しこゝみ腰に障子の小間から覗くと、鐵の大火鉢ばかり、誰も見

えぬ。

「まあ。」

式臺わきの横口にかう、ひよこりと出るなり、モオニングのひよろりとしたのが、と先づシルクハットを取つて高慢に叩頭したのは……

「あら。」

附髻をした料理番。並んで出たのは、玄關下足番の好男子で、近頃夢中に成つて居るから思ひついた、頭から顔一面、厚紙を貼つて、胡粉で潰した、不斷女の子を惱ませる罪滅しに、眞赤に塗つた顔なりに、乃ちハアトの一である。眞赤な中へ、おどけて、舌を出しておじぎをした。

「可厭だ。……一寸、半助さんは。」

「あいつは、もう。」

揃つて二人とも又おじぎをして、
「晝間つから行方知れずで。」

と口々に云ふ處へ、チヤンチキ、チヤンチキ、どんどん、ヒューラが、直ぐ其處へ。——女中の影がむら／＼と帳場へ湧く、客たちもぞろ／＼出て来る。……血の道らしい年増の女中が、裾長にしよろ／＼しつ、トランプの顔を見て、目で嬌態をやつて、眉をひそめながら肩でよれついたのと、入交つて、門際へどつと駆出す。

夫人も、つい誘はれて門へ立つた。

高張、弓張が門の左右へ、掛渡した酸漿提灯も、燦と光が増したのである。

桶屋の舩は、もう唸つて先へ飛んだらう。馬二頭が、鼻あらしを霜夜にふつ／＼と吹いて曳く、囃子屋臺を真中に、磔つたる石ころ路を、坂なりに、大師道のいろはの辻のあたりから、次第さがりに人なだれを打つて来た。辨慶の長刀が山鉾のやうに、見える、見える。御曹子は高足駄、おなじやうな桃太郎、義士の數が三人ばかり。五人男が七人居て、雁がねが三羽揃つた。……チヤンチキ、チヤンチキ、ヒューラと囃して、がつたり、がつり、列も、もう亂れ勝で、晝の編笠をてこ舞に早がはりの藝妓たちも、微酔のいゝ機嫌。青い髻も、白い顔も、紅を塗つたのも、一齊にうたふのは齷すくひの安來節である。中にぶつ／＼ぶつ／＼と喇叭ばかり鳴すのは、——此

は何處かの新聞でも見た——自動車をつくりものを、腰にはめて行くのである。

時に、井菊屋は殆ど一方の町はづれにあるから、村方へこぼれた祝場を廻り済して、行列は、此から川向の演藝館へ繰込むの、いま丁ど退汐時。人は一倍群つたが、向側が崖沿の石垣で、用水の流が急激に走るから、推されて踏はず憂があるので、群集は残らず井菊屋の片側に人垣を築いたため、背後の方の片袖の姿斜めな夫人の目には、山から星まじりに、祭屋臺が、人の波に乗つて、赤く、光つて流れた。

その影も、灯も、犬が三匹ばかり、まご／＼殿しながらついて、川端の酸漿提灯の中へぞろぞろと黒くなつて紛れたあとは、イんで見送る井菊屋の人たちばかり。早や内へ入るものがあつて、急に寂しくなつたと思ふと、一足後れて、暗い坂から、——異形なものが下りて来た。

疣々打つた鐵棒をさし荷ひに、桶屋も籠屋も手傳つたらう、張抜らしい眞黒な大釜を、蓋なしに擔いだ、牛頭、馬頭の青鬼、赤鬼。青鬼が前へ、赤鬼が後棒で、可恐しい面を被つた。縫ひぐるみに相違ないが、あたりが暗くなるまで眞に迫つた。……大釜の底にはめら／＼と眞赤な炎を彩つて燃して居る。

青鬼が、

「ぼう／＼、ぼう／＼、」

赤鬼が、

「ぐらツ〜、ぐらツ〜。」

と陰氣な合言葉で、國境の連山を、黒雲に背負つて顯れた。
青鬼が、

「ぼう〜、ぼう〜。」

赤鬼が、

「ぐらツ〜、ぐらツ〜。」

よくない洒落だ。——が、譯がある。……前に一度、此の温泉町で、櫻の盛に、假装會を催した事があつた。その時、墓を出た骸骨を装つて、出齒をむきながら、卒堵婆を杖について、ひよろ〜、ひよろ〜と行列のあとの暗がりを縫つて歩行して、女小兒を怯えさせて、それが一等賞になつたから。……

地獄の釜も、按摩の怨念も、それから思着いたものだと思ふ。一國の美術家でさへ模倣を行ふ、況や村の若衆に於てをや、よくない眞似をしたのである。

「ぼう〜、ぼう〜。」

「ぐらツ〜、ぐらツ〜。」

「あら、半助だわ。」

と、ひとりの若い女中が言つた。

石を、青と赤い踵で踏んで抜けた二頭の鬼が、後から、前を引いて、づし〜と小戻りして、人立の薄さに、植込の常磐木の影もあらはな、夫人の前へ寄つて來た。

赤鬼が最も著しい造聲で、

「牛頭よ、牛頭よ、青牛よ。」

「もうー、」

と牛の聲で應じたのである。

「やい、十三塚にけつかる、小按摩な。」

「もう。」

「これから行つて、釜へ打込め。」

「もう。」

「そりや——歩べい。」

「もう。」

「あ、待つて。」

お桂さんは袖を投げて一歩して、
「待つて下さいな。」

と釜のふちを白い手で留めたと思ふと、
「お熱々。」

と退つて耳を壓へた。わきあけも、襟も、亂るゝ姿は、電燭の霜に、冬牡丹の葉ながらくつる
るやうであつた。

四

「小一さん、小一さん。」

たとへば夜の睫毛のやうな、墨繪に似た松の枝の、白張の提灯は——
「怒う呼んで、さしうつむ
いたお桂の前髪を濃く映した。」

婀娜にも優しい姿は、コオトも着ないで、襟に深く、黒に紫の裏すいた襟巻をまいたまゝ、
むくんだ小按摩の前に立つて、そと差覗きながら言つたのである。

棲が幻のもみぢする、小流を横に、其の一條の水を隔てて、今夜は分けて線香の香の芬と立つ、
十三地藏の塚の前には外套にくるまつて、中折帽を目深く、欣七郎が杖をついてイんだ。

「——實は、彼等が、こゝに夜泣松の下を訪づれたのは、今夜これで二度めなのであつた——」

はじめに。……話の一筋が齒に抉つたほどの事だけれど、でも、その不快について處置をした
さに、二人が揃つて、祭の夜を見物かたゝ、此處へ来た時は。……「何だ、あの謙齋か、按摩
め。こくめで律儀らしい癖に法螺を吹いたな。」其處には松ばかり、地藏ばかり、水ばかり、何
の影も見えなかつた。空の星も晃々として、二人の顔も冴々として、古橋を渡りかけて、何心なく、
薬研の底のやうな、此の横流の細瀧に續く谷川の方を見ると、岸から映るのではなく、川瀬に提
灯が一つ映つた。

土地を知つた二人が、ふと之に心を取られて、松の方へ小戻りして、向合つた崖縁に立つて、
谿河を深く透かすと、——こゝは、いまの新石橋が架らない以前に、對岸から山傳ひの近道する
のに、樹の根、巖角を絶壁に刻んだ徑があつて、底へ下りると、激流の巖から巖へ、中洲の大巖
で一度中絶えがして、板ばかりの橋が飛々に、一煽り翻つて落つる白波のすぐ下流は、忽ち、白
晝も暗闇を包んだ釜ヶ淵なのである。

その殆ど、狼の食ひ散した白骨の如き假橋の上に、陰氣な暗い提灯の一つ灯に、ぼやりくと
小按摩が蠢いた。

思ひがけない事ではない。二人が顔を見合せながら、目を放さず、立つうちに、提灯は此方に動いて、しばらくして一度、ふはりと消えた。それは、巖の根にかくれたので、やがて、縁日の龍燈の如く、雑樹の梢へかゝつた、それは崖へ上つて街道へ出たのであつた。

——その時は、お桂の方が、衝と地藏の前へ身を躲すと、街道を横に、夜泣松へ小按摩の寄る處を、

「や、御趣向だなあ。」と欣七郎が、のつげに快活に碎けて出て、

「疑ひなした、一等賞。」

小按摩は、何も聞かない振をして、蛙が手を拵くが如く、指で搜りながら、松の枝に提灯を釣すと、謙齋が饒舌つた約束の如く、そのまゝ、しよぼんと、根に踞んで、つくばひ立の膝の上へ、だらりと両手を下げたのであつた。

「おい。一等賞君、おい一杯飲まう。一所に來たまへ。」

其の時だ。

「びい、ぶう。」

笛を銜へて、唇を空さまに吹上げた。

「分つたよ、一等賞だよ。」

「びい、ぶう。」

「さ、祝杯を上げようよ。」

「びい、ぶう。」

空嘯いて、笛を鳴す。

夫人が手招きをした。何が故に、そのうしろに龍女の祠がないのであらう、塚の前に面影に立つた。

「ちえッ」舌うちとともに欣七郎は、強情、我慢、且つ執拗な小按摩を見棄てて、招かれた手と肩を合せた、而して低聲をかはしく、町の祭の灯の中へ、並んでスツと立去つた。

「びい、ぶう。……」

「小」さん。」

暫時して、引返して二人來た時は、さきにも言つた、欣七郎が地藏の前に控へて、夫人自ら小按摩に對したのである。

「びい、ぶう。」

「小」さん。」

「びい、ぶう。」

「大島屋の娘はね、幽霊に成つて了つたのよ。」

と一歩ひきさま、暗い方に隠れて待つた、あの射的店の幽霊を——片目で覗いて居た方のである——竹棹に結へたなり、ずりりと出すと、ぶらりと下つて、青い女が、さばき髪とともに提灯を舐めた。その幽霊の顔とともに、夫人の黒髪、びん搔に、當代の名匠が本質へ、肉筆で葉を黒漆一面に、緋の一輪楯の櫛をさしたのが、したたるばかり色に立つて、却つて打仰いだ按摩の化ものの眞向に、一太刀、血を浴びせた趣があつた。

「一所に、おいでなさいな、幽霊と。」

水ぶくれの按摩の面は、いちじくの實の腐れたやうに、口を呑みわつて、ニヤリとして、ひよろりと立つた。

お桂さんの考慮では、然うした……此の手段を選んで、小按摩を藝妓屋町の演藝館……假装會の中心點へ送込まうとしたのである。然うして了へば、ねだ下、天井裏のばけものまでもない……雨戸の外の葉裏に居ても氣味の悪い芋蟲を、銀座の眞中へ押放したも同然で、あとは、さばさばと寐覺が可い。

……思ひつきで、幽霊は、射的店で借りた。——欣七郎は紳士だから、さすがにこれは阻んだ

ので、かけあひはお桂さんが自分でした。毛氈に片膝のせて、「私も假装をするんですわ。」令夫人と雖も、下町娘だから、お祭り氣は、頸脚に幽な、肌襦袢ほどは紅に膚を覗いた。……

もう容易い。……つくりものの幽霊を眞中に、小按摩と連立つて、お桂さんが白木の兩くりを町に鳴すと、既に、まばらに、消えたのもあり、消えさうなものもある、軒提灯の蔭を、つかず離れず、欣七郎が護つて行く。

藝妓屋町へ渡る橋手前へ、恰も巨寺の門前へ、向うから渡る地獄の釜。

「ばうく、ばうく。」

「ぐらツく、ぐらツく。」

「や、小按摩が来た……出掛けるには及ばぬわ、青牛よ。」

「もう。」

と、吠える。

「びい、ぶう。」

「ばうく、ばうく。」

「ぐらツく、ぐらツく。」

其處で、一行異形のもの、驚の夢を踏んで、橋を渡つた。

鬼は、お桂のために心を配つて來たらしい。

演藝館の旗は、人の顔と、頭の中に、電飾に輝いた。……町の角から、館の前の廣場へ聳と詰つて、露臺に溢れたからである。此時は、軒提灯のあと始末と、火の用心だけに家々に残つたもののほか、町を擧げてこゝへ詰掛けたと言つて可い。

そのかはり、群集の一重うしろは、道を白く引いて寂然として居る。

「おう、お嬢さん……そいつを持ちます、俺の役だ。」

赤鬼は、直ちに半助の地聲であつた。

按摩の頭は、提灯とともに、人垣の群集の背後についた。

「もう、要らないわ、此店へ返して、ね。」

と言つた。

「青牛よ。」

「もう。」

「生白い、いゝ肴だ。釜で煮べい。」

「もう。」

館の電飾が流るゝやうに、町並の節竹が、櫻のつくり枝とともに颯と鳴つた。更けて山嵐がし

たのである。

竹を掉抜きに、たとへば串から倒に幽霊の女を釜の中へ入れようとした時である。砂礫を捲いて、地を一陣の迅き風がびゅうと、吹添ふと、すつと抜けて、軒を斜に、大屋根の上へ、あれあれ、もの干を離れて、白帷子の裾を空に、幽霊の姿は、煙筒の煙が懐手をしたやうに、遙に虚空へ、遙に虚空へ――

群集はもとより、立溢れて、石の點頭が如く、踞みながら視て居た、人々は、羊の如く立つて、あつと言つた。

小一按摩の妄念も、人混の中へ消えたのである。

五

土地の風説に残り、ふとして、浴客の耳に傳ふる處は……此だけであらうと思ふ。

しかし、少し餘談がある。とにかく、お桂さんたちは、來た時のやうに、一所に二人では歸らなかつた。――

風に乗つて、飛んで、宙へ消えた幽霊のあと始末は、半助が赤鬼の形相のまゝで、蝙蝠を吹か

しながら、射的店へ話をつけた。此奴は禪にするため、野良猫の三毛を退治て、二月越内證で、もの置で皮を乾したさうである。

笑話の翌朝は、引續き快晴した。近山裏の谷間には、初葺の残り、乾びた占地茸もまだあるだらう、山へ行く浴客も少くなかつた。

お桂さんたちも、そゞろ歩行きした。掛稻に嫁菜の花、大根畑に霜の濡色も暖い。

畑中の坂の中途から、耳利の峰におはす大観音に詣でる廣い道が、松の中を上りになる山懐を高く廻つて、枯草葉の徑が細く分れて、立札の道しるべ。歡喜天御堂、と指して、……福徳を授け給ふ……と記してある。

「福徳つて、お金ばかりぢやありませんわ。」

欣七郎は朝飯前の道がものういと言ふのに、一寸軽い小競合があつたあとで、參詣の間を一人待つ事になつた。

「こゝを、……わきへ去つては可厭ですよ……一人ですから。」

お桂さんは勢よく乾いた草を分けて攀ち上つた。欣七郎の目に、其の姿が雜樹に隠れた時、夫人の前には再びやゝ急な石段が顯はれた。軽く喘いで、其上ると、小高い皿地の中窪みに、垣も、折戸もない、破屋が一軒あつた。

出た、山の端に松が一樹。幹のやさしい、その見晴しで、一寸下に待つ人を見ようと思つたが、上つて来た方は、紅蕘と粉壁と、そればかりで夫は見えない。あと三方はまばらな農家を一面の畑の中に、弘法大師奥の院、四十七町いろは道が見えて、向うの山の根を香都良川が光つて流れる。わきへ引込んだ、あの、辻堂の小さく見える處まで、昨日、午ごろ夫婦で歩いた、――却つて其處に、欣七郎の中折帽が眺められるやうである。

あゝ、今朝も其のまゝな、野道を挟んだ、節竹に祭提灯の、稲田すれに、さら／＼ちら／＼と風に揺れる處で、欣七郎が巻煙草を出すと、燐寸を忘れた。……道の奥の方から、帽子も被らないで、土地のものらしい、霜げた若い男が、蠟燭を一束買ったらしく、手にして来たので、湯治場の心安さ、遊山氣分で聲を掛けた。

「一寸、燐寸はありませんか。」

ぼんやり立停つて、二人を熟と視て、

「はい、私どもの袂には、あつても人魂でしてな。」

すた／＼と分れたのが、小上りの、畦を横に切れて入つた。

「坊主らしいな。……提灯の蠟燭を配るのかと思つたが。」

俗ではあつたが、うしろつきに、欣七郎が然う云つた。

然う言つた笑顔に。——自分が引添うて居るやうで、現在、朝湯の前でも乳のほてり、胸のときめきを幹でおさへて、手を遠見に翳すと、出端のあし許の危さに、片手を其の松の枝にすがつた、浮腰を、朝風が美しく吹靡かした。

しさつて褌を合せた、夫に對する、若き夫人の優しい身だしなみである。

まさか、此の破屋に、——いや、此の松と、それより梢の少し高い、對の松が、破屋の横にやや又上坂の上にあつて、根は分れつつ、枝は連理に連つた、濃い翠の色越に、額を捧げて御堂がある。

夫人は衣紋を直しつつ近着いた。

近づくと、

「あッ、」

思はず、忍音を立てた——見透す六尺ばかりの枝に、倒に裾を巻いて、毛を蓬に落ちかゝつたのは、虚空に消えた幽霊である。唯見ると顔が動いた、袖へ毛だらけの脚が生え、脇腹の裂目に獸の尾の動くのを、狐とも思はず、氣は確に、しかと犬と見た。が、人の香を慕つたか、そばへて幽霊を噛みちらし、まつはり振つた、そのまゝで、裾を曳いて、する／＼と寄つて來るのに、

はら／＼と、慌しく踵を返すと、坂を落ち下りるほどの間さへなく、帯腰へ疾く附着いて、ぶる

りと觸るは、髪か、顔か。

花の吹雪に散る如く、裾も袖も輪に廻つて、夫人は朽ち腐れた破屋の縁へ飛繩つた。

「誰か、誰方か、誰方か。」

「うゝ、うゝ。」

と寢惚聲して、破障子を開けたのは、頭も、顔も、其のまゝの小一按摩の怨念であつた。

「あれえ。」

聲は死んで、夫人は倒れた。

此の聲が聞えるのには間遠であつた。最愛最惜の夫人の、消息の遅さを案じて、急心に草を攀ぢた欣七郎は、歡喜天の御堂より先に、たとへば孤屋の縁外の缺けた手水鉢に、ぐつたりと顔をつけて、朽木の臺にひざまづいて縄つた、青ざめた幽霊を見た。

横ざまに、杖で、敲き拂つた。が、人氣勢のする破障子を、及腰に差覗くと、目よりも先に鼻を撲つた、此のふきぬけの戸障子にも似ず、したゝかな酒の香である。

酒ぎらひな紳士は眉をひそめて、手巾で鼻を蔽ひながら、密と再び覗くと齊しく、色が變つて眞蒼になつた。

竹の皮散り、貧乏徳利の轉つた中に、小一按摩は、夫人に嚙りついて居たのである。
読む方は、筆者が最初に言つた或る場合を、ごく内端に想像さるゝが可い。

小一に假装したのは、此の山の麓に、井菊屋の畠の畑づくりの老僕と日頃懇意な、一人棲の堂
守であつた。

本妻和讃

「……書生さま〜。」

と背後から甘いやうな女の聲で、

「ありがたい、書生さま。」

今度は少し切つた聲で呼ばれたので、さきへ歩行いて居た川村圭吉は振り返つた。――振り返つて見てぎよつとした。聲の其の甘たるく若さうなのは似も附かない、よぼ〜媼さんが、冬の日に南に薄ぼけて、枯尾ばなに似て吹かれて居る。日中で可かつた、たそがれだつたり、時雨れたり、分けて夜でもあらうものなら、身の毛が悚立つに相違ない。

場所も一口坂である。……九段が近い大通りを土手へ下りる廣い坂だが、一方にお濠の並木を控へて、片側が、女學校だの、工場だの、片側邸ならびだから、閑である。尤も往還の時刻だと、雨上りの虹が湧くやうに、女學生たちが一齊に群つて、今出来の千代紙に色インキを打覆けた景色に成るのだが、午後もやがて四時だから、上、下、廂髪も靴も見えぬ。

さみしい處で唐突に呼ばれたのであつたが、旦那と呼ばれる風俗はなくても、もし〜でも、一寸でも、お前さん、……呼びやうはいくらもあるのに、「書生さま」――鯉丈が書いた和合人に、秋雨のそぼ降る夜、のらくらものが集つて、怪談地口で、しんねこに淋しがる時、なかまが二人、前町の空屋にひそみ、茄子の仕掛で其の能樂亭の雨戸をトン〜。ぞうふら即ちめかぼんで、主人を呼ぶ聲が、「和次さまや、和次さまや――和次郎さまや、和次郎さまや。……戸を開ければ影もなし、しめて引込めば、又トン〜、糸を引いた茄子どのが敲いて、「和次さまや、和次さまや、和次郎さまや、和次郎さまや。」――人間の音でない。異變な聲だと、眞面目に怯かされる話がある。よくそれに似て居た、「書生さま。」それに「感謝詞。」が要るものか。

唯、怪訝に熟と視ると、何の事だ。

「何だ……」

圭吉は思はず苦笑した。

「剥身屋の媼さんぢやないか。」

むき身と雖も一屋體の商賣である。敢て吐出すやうに應じたわけではなかつたのだけれど、うっかり書生さまに對したので。第一、たゞ見知越の――それも圭吉の住居から大通へ出る横町の路地のとば口が其の店で、通りがかりの見知越、此と云つて口をきいた事もなかつたのである。

爺さんの方は知つて居る。四季をりくくの雨ふり、風ふき、秋雨の夕暮がた、わけて時雨の日、雪の朝は、しほから聲は此だぞ、と思はれる、切しはつた奴を喝と絞つて、鐵拐仙人を殺のま、吐出す如く、「あさり、殺あさり、蛤やい、大馬鹿小馬鹿の剥身やい。」——蛤やーい。」お、寒い。……壯に降つてる。晩には蛤鍋と願ひたい。其處で臺所から井を持つて、襟を搔合はせ搔合はせ、戸口へ細君が買ひに出ると云つた寸法で、別して、雪の名ぶつだつた。また此の親仁が、町内の床屋の店を、うそく覗く時と云ふと、講釋仕込のせきばらひ、えへん！「ほ、う、武は益々壯ぢやな。」と無精髯の胡麻で和へた、大な馬頭でニヤ／＼と入つて来て、「曲垣平九郎先生が和太平ぢやて。……向井藏人が百々平ぢや。お前さん、越前家に於かせられて、馬術上覽の日は思はつせえ。五十萬石の御家中、汗水を流す處を、お馬場の隅から、廐中間の、百々平が片目を出して。」と、赤目の剥身そのまゝのどろりとした臉へ、輪にして貝殻爪の太い指をゴツンと當てて、「ニヤリ／＼と覗いてござるて。」また掌で頭を支へて、ぐるり／＼と胸はす、遠慮のない馬面だから此の形が餘程可笑い。居合すものは嬉しがつて、「景氣は何うだね、百々平さん。」と水を向けようものなら、「ふ、ん、的等は、子が浮木に乗つたも同然だ。」渾名を百々平と言つた。また馬の剥身屋と稱へて、町内の若い衆が不景氣の錢ない時、「馬肉で飲らうぜ。」は淺蜷であつた。——總長屋が取拂をくつて、さしわたし八町ばかり此の一口坂の崖裏へ越したと聞く。

しかし、二三年來、雨ふり、雪ふりには圭吉の町内へ喚いて來た。——その、女房の姫さんである。

誰も云ふ事だが、剥身屋と云ふと目が悪い、ひどいのは掃溜へ蚯蚓の湧いたやうなぐしや／＼としたのがある。姫さんも、汐かぶれの目を眩しらしく、西日を仰ぎながら、やぶれた紺足袋、緒のゆるい日和下駄で、横あるきに近寄つて、

「あんた、もし、……お忘れですやろな。ほんに久しい事ですすよつていな。」と愈々甘い。

「はあ……」

「私もな、あんたの御近所に居りました頃は、お通りがけの節、時々お見掛け申したけれど、些とも氣がつかませなんだぞいな、……もし、今な、此處で、ちよつと御様子を見ましてな、あ、ほんに然うであつたと吃驚するほど氣がついて、それでな、吃驚ついでや、もし、うつかりお呼び申したのでござりますよ。書生さま、あんた、とうの以前、本郷の伊達さんにいらつした方ではござりませぬかえ。なあ、間違うたら御免なさりましたよ。」

「間違ひません。」

伊達の名の、我がために貴きにつけて、剥身屋の姫にも殆ど恭しいまでに正しく答へた。いや、其の名は圭吉のためにのみ貴いのではない。渠の恩師、いまはなき、伊達先生は、畫壇の巨匠と

して、世のためにも貴いのであつた。

「何うして？……お媼さん。」

「どうしてとおつしやつて、私も、ありいと思うたぞいな。町なら三つ四つより離れては居らんけれど、場所が違うては、お顔を見ても、ふつつり思出しもしませんほど、年も澤山たちましたし、何も彼も變りましたによつて、お覚えのないのも尤もでござります。あのな、私はな、書生さま、……然う言はんとつりが悪い。——御免なさりましよ、ほ、ほ、。」

と氣味の悪いまで、笑の腹籠を口許へ浮ばせて、

「此の坂を上つた右の横町や——今剥身屋で居ます家は、左の崖下で、軒がな、崖の中途にぶら下つた鹽梅や、ほ、。とんと鳥の巢か、蠶の棚の工合やし、ほ、。庖丁と蛤を描いた看板ばかりが坂の中途に上つて居て、覗くと廂は谷底や、底同然や、ほ、。お互様の故郷でな、ほれ、あんた、大雪の積つた時は、此の下に薪屋あり、八百屋ものござ候と、空へかきつけが出ると言ひますやろ。……同然や。按摩が引窓から落ちて來たは、たとへやが、ほんに、按摩どころか、郵便屋さんも、屋根の空を走りますぞいなあ。——けど、むかしはな。……」

その誰であるかを、刻下に聞かうとする、圭吉に取つては、苛立たしいほど持つて廻つて、のんびり、ゆつたりと間を引いて、

「むかし右の方の横町に——そこもな、家並がまるで變つて居ますけれど。」

と、まだ間伸びがして、袂をかきこそと薄汚れた切端を、效性なく撮出した鯉口、其の手で、坂を向うへ指して、

「……彼處に居ました髪結いな、お園でござりますぞいな、もし……ほ、。」

「あ、髪結さん、あの、上手の？……」

と思ふのと言ふのと同時に、そのゆつたりと、のんびりで、した、か惱まされたのを思出した。鬘のどの形を結はしても、最も人にすぐれたが、紫、藤色、切を扱つて、髪の艶、櫛の照、さし込の簪の光まで、「てんじん」を結はせては、上手も不思議な、巫子と呼ばれた名譽であつた。

容色と、それに上品なので聞えた、伊達先生の令夫人が、意氣で、婀娜な、色つばい「てんじんの」姿を時に見掛けたものは、いまもいくらもあらうと思ふ。此の髪結、お園が結び手だつたからである。いろだか、亭主だか、年下の寫眞屋と同居をして居て、内は番町の、何とか館だと、甘つたれた聲で自ら名告つて、髪結さんと言はれたがらない。其の何とか館のおかみさんと言はうものなら相好を崩したものだつけ。また大のなまけ屋で、きちやうめんに結び日になんぞ出て來た事はめつたにない。其處で、伊達先生の玄關番をして居た圭吉が、幾度も迎の使者に立つたのであるが、「館」どころか、二階の硝子戸さへ嵌つて居ない。長火鉢の奥の薄暗い小部屋から、

いま起きたと言ふ顔をして、胸も襟もはだけた年増が、煙管を片手に、ずりりと立顯はれて、「血の道が起りましてねえ。」と聲までだらけて居るのが癖であつた。時とすると、其の顔を洗つて支度をするまで、土間に居催促をして、圭吉は此の道を、連立つた事が度々である。——「髪結さん、いや、おかみさん、よくお煩ひだが、血の道と云つてどんな病氣なんですか。」「ありがたい、書生さま、私知りませんわ、ほ、ほ。」いや、その、ありがたいでも、一度で思出さなければ成らなかつた。のに——

十八九年前に、一度雪國の其の故郷へ歸つた切、音づれが絶えた。——伊達先生の令夫人は、斷念めがたう惜しがつて、圭吉が一年歸省する時、見事な土産ものを託つた。——其の居處を探すと、山手の荒果てた大な侍邸に、また寝て居た。古壘の上を暗い奥から、例のずりりと出て来て、「ありがたい、伊達さんの書生さま。」とべつたり式臺に膝をついて、それでも可懐がつた。「東京へ出たら、是非。」と言づけを言つて別れたが、人づてに土地で聞けば、五百石どりのお嬢さんが、江戸から來た鳶のものと出來て勘當され、なかまの鳶の女房の腕の冴えた髪結に、仕込まれたのださうである。……とばかりで、消息は絶えたのである。

それが、剃身屋の此の媼さん。……

成程おなじ場所、おなじ所で出會つたのでないと解るまい。

みつわぐむまで老にけるかな。あの血の道が目にも祟つた。赤爛れの臉に溢る、目脂は、雲丹を塗つたやうである。

「ほ、ほ。」

と、つけもなく又笑つて、其の薄汚れた切端で、ちよぼ、ちよぼと、目脂を拭ふ。……

二

圭吉は、忽ち、赤目の髪結が、影に成つて座に映るのを感じた。

「——一つ此の婦の髪を結はせて見ようか。」

それは、置炬燵を傍に、見るも痛々しいまでも瘦せおとろへた、病身な従弟の女房に、さし向つて居た、時の間であつた。名はお銀さんと言ふ……が白絲のやうに、炬燵にも、すんどの火鉢にも、柱にも、灰にさした火箸にも、青白く巻けさうに寝れて居る。

「こんなに成つて了ひました。」

大島の紺の羽織の袖ぐるみ、中に小袖の袖口を包んだまゝ、薄い淺葱の襦袢の裏をずりりと返した……それも手首に重さうに……隔てぬなかとて、二の腕までくると捲いて、露呈に見せた、が、熟と視ると、お銀が自からの睫毛の濃さ、重さにも、細い腕は堪へやらす押伏せられさうで

可哀であつた。

「お、お、寒い〜……早く片づけて。」

肉を透く青い筋の、柳が霜に散るやうに、見る／＼、凍氣立つのを見て、火鉢をぐいぐいと我が膝で押しながら、圭吉は然う言つた。

力が膝に傳つて、お銀の萎々とした片袖は、炬燵蒲團に凭掛つた風情に成つて、

「もう、寒いなんか通越して居るんですよ。」

と、仇氣ないまでに仰向いて、訴へるやうに云つた。餘り近々と向合つた面ほてりに、頬に片手を掛けたのさへ、力なく辻落ちて、ちらりとこぼる、友染とともに、火箸の上へかゝつたのである。

「そんなに雪に成つてこれはお世辭だよ、」

と故と目遣ひしながら、

「消えて行くやうな事を言ふものぢやありません。——私だから可いが、ね、お留守中には、餘り軽々しく他人に見せて貰ひたくないもんだ。惱ませられるぜ、串戯ぢやない。長煩ひだつて、お綺麗ですよ。」

「もう治りません！」

「え、」

「死ぬ病人には垢がつかないつて言ひますわ。」

「馬鹿な事を言ふもんぢやありません。小兒たちも聞いてるぢやないか。」

と圭吉は、屹とたしなめるやうに言つた。

「小兒は聞きあきて居ますもの、……何とも思ひはしませんよ。」

と、垂れた頸も、げつそりとして白い。大柄で、背のすらりとした女だけに、病んで脱けたと云ふ髪さへ、支へかねさうで危つかしい。

「ねえ、坊や。」

と、親鳥は、弱い翼を開く状に、肩をしなければ、其處に男の兒の顔を視上げた。

此の雛兒は、白毛絲の丸帽子、取手の擬寶子をぼんと宙に立てて、出来るだけ踏張つても、尙ほ其の半を剩す櫓一杯引跨いで、母さんと客との真中に、高々と炬燵に乗つて、洋服の衣兜から、堅豆を擲出しちや餘念もなく食つて居る。

十三から一、九つまでの娘たち、一樣におさげに結つたのが學校がへりの袴を取つたばかりのなりで、襖一重の八疊にみな威勢のいゝこと、師走間近なハツさがりを、縁の障子を開放し、半ば縁側へ出たのも居て、揃つて毛絲の編ものする。

夜具、蒲團、毛布、葛籠、定紋萌葱の風呂敷も、掛けたり積んだりの投出しな——此は一家がこゝへ引越したてで、まだ片づかないまゝなので。

長男は學校の寄宿舎へ入つて居て、もう一人男の兒は、何處へか素飛んだものらしい。

其處で、客には從弟の、内の主人だが、藤枝時太郎と云つて、家元格、一流の舞踊の師匠で、年配と言ひ伎と言ひ、もう一つ男振まで申分のない人物で、弟子たちの稽古、座敷の勤め、いづれ、行はれれば行はれるほど忙がしい家業から、留守に不思議はないのである。が、こゝに留守なのは、たゞ留守なのではない。もう五七年以前から、もと藝妓のいろで出來た妾があつて、舞臺も其處に置いて居る。すつかり別宅で納つて、こゝの引越しの時にも、時さんは居合さず、まだ其つ切歸らない様子が見える。

お銀は、身體の病より、心の惱みに傷むのである。

「ねえ、坊や。……」

お母さんは櫓を見上げた、小兒の顔から瞳を外らして、客に横顔の袖に涙を包んだ。

三

圭吉は……此の坊やにさへ面目なかつた。——實は震災以來と云ふものの、其のすつと前から

不沙汰をして居たのである。從弟の家は、あの時、まる焼に成つて、當時板橋の方へ引越した。遠さも遠し……圭吉の方も住家は焼けなかつたまでの事——殆ど半壊れの混雜紛れで……勿論、月の經つうちには、外出に便宜な時さんの方とは、會つて、お互の生命の無事を悦びも祝ひもし、一所に杯を取つた事もある……從弟のみ手だ。——

さて、つい四五日前の事、從弟から——震災後は旅行勝でもあつた——久しぶりの端書で、「すぐ圭さんの近所へ。」と云ふ字が大きく目について、其の板橋から麴町へ引越しの通知が來た。新しい親類が一軒殖えたやうに思つたのである。たゞし、氣に成るから消印をためすと、府下の本家からではない。これぢやあ歸られない築地の別宅からであつた。不埒千萬と苦りながら、すぐにも家見舞に出掛けよう。小兒が大勢だ、……煎餅、蜜柑とは言ふものの、お互に所帯持の事だから、どつさりお惣菜に成る肴が、出す入らずで可かりさうだが、何か取まぜて然るべきものはあるまいかと、圭吉は女房とも心づもりの相談をしつつ、二三日訪ひおくれた。——

「——をかした事があるんです。近頃はやる、此もね、三角關係と云ふ奴だよ。——お銀さん……お耳觸りかも知れないが、もう此は、あなたには病氣見舞も同然な言葉だから堪忍したまへ。引越の端書をうけると、あの——番町……番地と云ふのを、何故か、いきなり、英國大使

館の方角と思つたんだね。ね、丁ど私の居る所と、此の一口坂の方角と、大使館の見當を見ると、大く三角の形に成るから。……

其處で、妙な事は、御存じの出不精の處へ、おひくく年末だし、まあ、お庇で口繪だの、挿繪だの、いづれ小口ぢやあるけれど、板下の方もいそがしくつて、湯へ行くほかは、めつたに用たしにも出なかつたのが、珍らしく、今日は二時頃から散歩に出たのさ。此頃に珍らしい、また長閑でね、……日がかげると急に寒く成つたが——かへり花でもありさうな小春日です。——散歩に、手近な所なら、清水谷の公園と云ふんだけれど、久しく外出をしないと、何だか町筋が可懐い。……それも混雑する處は辟易さ。市ヶ谷見つけから、田町うらへ入つて、合羽坂、淨瑠璃坂——よく仇討の講談に出る處だ、山の手だけれど江戸らしい。並んで名所があるんです。逢坂、ほりかねの井、若宮八幡と續く。坂下の仲町、船河原町は何となくもの靜でね、……肴屋の店の鱈の切身に日のほか／＼と當るのも長閑に見えたよ。……あ、此處がお濠の松にも遠見の富士にも、美しい、赤い鳥の社だ、と三重吉さんの新築を見たり、……萩の枯葉に蝶を見たり——その近處の板塀を、梅の枝が覗いて、もう咲きさうな日當りに、笠木に乗つて、お猿が一匹うしろ向きに、ほか／＼してちよんと居たのさ、友染のちゃん／＼子を着てね。私は少時立停つて見て居たのさ、新見附を入るとすぐの處だから、大きいのが着いて、小兒たちを見せに遣るとい、ね。

つツと神樂坂へ出て、買ものをしようかと思つたんだけど、やがて日も陰つたし、そろ／＼歸らうと思つて新見つけを入つたんだが、それが久しぶりです。まだ、あの工事中に、稲妻形にキリキリと曲げて掛けた假橋を足駄で渡つて、真中頃で、枕を打込む濠の底の深いのに、足が震へて欄干につかまつて漸と越した以來ですよ。あなたがもとの元氣だと、(おんぶをおしな)と背中を出してお笑ひだらう。……

——見つけを入つて、然うね……一口坂を、大な船底形に見た處で、うしろから呼ばれて、思ひも掛けない、夢のやうな人に逢つたんだよ。——え、そつちの三角かつて?……串戲ぢやない。——そんなに三角に打撞ると大地が揺れます——まあ、穩にお聞きなさい。何しろ、よぼ／＼の媼さんだ。

媼さんは、郵便を出しに行つた歸りだと言つたが、私のうまれ故郷のものでね。——
颯と一度、此の時も、影が立つた——
「五十年前のお嬢さんさ。それを、袖にしては不深切のやうだけれど、何しろ、とぼ／＼して居て、話しながら歩行のはじれつたいから、一寸寄道があると言つて、ようもない其處等の門札を覗いたのさ。——媼さんは坂の上で別れたがね。——おや……と思つた。
時さんの引越通知の——町ぢやあないか。……私はまるで見當を違へて居た。——番町の番町

知らずと云つてね。あなたも、やがておなかまだよ。——番地も近い。……見附の方へ小戻をす
ると、土手下へ掛けて番地が殖える。此方へ二軒三軒と若く成つた。ぴつたり合つた。——此家
の柄にしても些と堅すぎる邸だけれど、何しろ地震後の事だと思つて、また一二軒覗くと、紙の
名刺が貼つてある。引越したてだ、違ひない。……

が、私は通り過ぎたんです。——餘りの御不沙汰。……地震の日はあなたが、病身な其のから
だで、挿鉢のやうな窪地から、針の山の崖を炎に追はれて、小兒たちと逃げ惑つて、漸と九段の
銅像の下に野宿して、二日間、火の海を視ながら嬰兒の牛乳の饅一つ、それも水もないのを、倒
れたり、轉んだり、で、堪へて居なすつたと云ふのを、私もあとで、野宿をしながら聞いたばか
り、其切の御不沙汰です。可厭に、じんぎ立てをすと思はれては困るけれど、引越の祝に何一
つ、今日は持たない。

入りかねたから一度素通りをして、坂の中途まで行つたがね。さあ、然うなると、また、見す
見す、現に、其處に、その地獄から蘇生つたやうなあなたが居るのを、見舞はないでは何うして
も通切れません。……また、すごくと返つたがね、——今度は、若い女の兒、それも娘たちし
た聲が聞えたから、勝手が違つて、又弱つたんですよ。——前には、いつも大抵嬰兒の泣聲が聞
えたんだからね。不斷は黙つて通る處を、家の勝手も違つたし……其處で、更つて、「御免、頼ま

う。を遣つたんだが、」

胸一杯を、一つづけに、此の挨拶は五分の上を出なかつた。

「何にも言はずに、……お互に唯無事で、——處で、嬰兒は何うしたの。」

「あかんぼなんて。……」

式臺上へよろ／＼と出迎へて、「まあ、」と云ふま、——其處で一寸猶豫つた圭吉に、お銀は取
纏らないばかりにして、いきなり、炬燵の、こゝへ連込んだものであつた。が、火鉢を押すのも、
息ぎれに、うすく染めた臉さへ、颯と蒼褪めるまで寂しい顔して、

「あかんぼなんて、……私はもう、世にも人にも棄てられました。小兒の巢の巢守なんです。……
此の身體ですものね、たき乳母の役も勤りません。乳なんか、もう皺びて、一つたらしだつて
出ませんよ。」

「いえさ、まあさ、……あの、いつか、牛乳で育てて居なすつた、あの、嬰兒さ。」

と、座敷を向して、次の室の長火鉢手前なる、襖の影を覗込むと、

「まあ、皆、小父さんに、お辭儀をしないのかね。」

娘たち三人が、

「入らつしやい、」

「小父さん、」

「今日は。」

おさげに、リボンがひらく／＼ひら、蝶も蜻蛉も片親の留守。

「はい、はい。」

圭吉は胸がせまつた。

「あの、大いのが、とみですよ。——容子がいゝつて、小父さんが、いつもお讚めなすつた。」

「あゝ、今も容子が可い。」

其の大人びたのは、一番に縁の端に居て、おさげを横顔に庭を向いた。

「あとも皆別嬪だ。」

二人は揃つて、うつむいて、莞爾した。

圭吉は涙ぐんだ。

「……圭さん。」

お銀はくもり聲で、

「ほんとうに、……しばらくですのね。あなた、……此の兒が、其の時の嬰兒ですよ。」

と、はじめから炬燵に踏みはだかつた、其の兒の毛絲帽子を、瘦せた指で軽く弾いた。

「震災からも二年です、嬰兒は、もう五つ。」

「あゝ、……相濟まない、御無沙汰。」

と、圭吉は、こゝで小兒に、面目ない氣がしたのであつた。

既に此の兒は、母さんに、嫩のまゝの杖である。……何故と云ふに、今しがた玄關へ訪れて、

其の「……頼まう。」を遣ると、二人づれで、ばたく／＼と出て来た女の兒が、見忘れた小父さんの

顔に、解せないと云ふ、くるつとした目をしたから、そこで圭吉の言つた事が可笑い。……「お

母さんはお内？……」多分、お父さんの居ないのは承知の上の口上で。

「お母さんはお内かい。」「あい。」と駆込むと直ぐ其處へ。——「どうもお聲が、と言ひながら、

棲の亂るゝまで急いで出た、お銀はもう肩がふるへた。追飛んで、どんと来て、その袖の下へ立

つて、毛絲帽子を出した、此の男の兒が、病身の母さんの……其處で杖のやうに見えたのであつ

た。圭吉は今更ながら、其のやつれ方にぎよつとした。小袖の柳條と束髪も、たゞ面影の映す骸

骨で、白脛に艶なる蹴出しも、冬冷し。……模様の水仙……腰は葉よりも細かつた。

但幽に残んの枝に色香が通ひ、削つた骨に霞を掛けて、白き人膚の薫つたのは、遠い道の引越

に、その上のかげ氣のため、今日はじめて、小兒等のことで湯に入つた。湯ざめをしまいと、す

ぐに床へ、そのすつぽりと引被つて居た處だつたと言ふ……消えさうな湯の香である。
成程、寢床が炬燵を籠めて取つてあつた。

四

「ねえ、坊や。」

と圭吉は、お銀さんの言尻を其のまゝに、炬燵の大將にてれかくしを言つて、

「君かい、おぎい〜遣つて居たのは。」

「知らんねえやい。」

「はゝゝ、尤だよ。」

「健坊……何と云ふ口を利くんです——母さんの兄さんぢやありませんか。私が何うかして御覽……どんなにお世話になるか知れやしない。」

「お銀さん、何を詰らない。」

「えゝ、でも築地にも兒が二人までありますから、彼方の方が可愛いんですもの、お父さんはたのみには成りません——さ、ちゃんとお辭儀をして。頭を壓へようと手を伸ばすと、

「知らんねえやい。」

と、振刎ねて、炬燵の上へ突立つた。毛帽子の白いのが、颯と紅に成つたのは、いたづら裂きの靴足袋を踏込らして、はすんだる背の支へに、掛花活の紅椿が四五輪重つて落ちたのである。

「あ、」

「大丈夫だ。」

圭吉は衝と立つて、籠の揺れるのを壓へて言つた。

「水は溢れやしないから。……しかし、おたしなみですね。」

「庭に椿の樹がありますが、娘がいたづらに挿したんですよ。」

「あれ、不可い、其處等を踏荒しちや……」

「健ちゃん。」

小さい朝日奈は女護島を荒して居る。

「不可い、」

「健ちゃんてば。」

「不可ませんよ、健、もうあれですからね、世話が焼切れません。」
時しも、俄然として、虚空から呼ばはる聲あり。

「おすきなのを買はせませうか。」
帯を撫でて天鷲絨の手ずれた墓口を出して言った。——ぶん金の高島田に、白玉椿、浮彫の銀簪、緋の紋縮緬の十九の娘で、この時さんと見合をした時、——圭吉が橋渡ししなり介添なり、媒妁人した——「幾久しく、何うぞ。」と口の裡で、ひたと両手を支いて立つ拍子に、銅貨の音の

「お見事だ。」

「可厭ですわ。圭さん、私はもう。」

「いや、寧ろお手柄です——眞個にお楽しみだ。」

「楽しみどころなものですか。もう精も根もありやしません——あ、煙草。……さ、さあ、こゝに、敷島が。……さあ、めしあがれ。」

圭吉が、がさくと兩の袂を探すのに、早く心着いて、のみ分の、半ば揉みくしやにした敷島ひとつの紙函を、手で押して、押してよこして、強ひるのは、強ひるのでない。我が身を分けてのませる深切、兄も同じだと云つたのが、此の優しさは、姉が弟に對するやうな、煙でなしに従弟を通じて、血は自から通ふのである。

あゝ、敷島の一本さへ、沉や、母が兒のために、其の骨を削り、血を絞り、肉を裂いて、惜まない恩愛は、たゞもてなしの煙草ほどにもないのを思へ。

「おすきなのを買はせませうか。」

帯を撫でて天鷲絨の手ずれた墓口を出して言った。——ぶん金の高島田に、白玉椿、浮彫の銀簪、緋の紋縮緬の十九の娘で、この時さんと見合をした時、——圭吉が橋渡ししなり介添なり、媒妁人した——「幾久しく、何うぞ。」と口の裡で、ひたと両手を支いて立つ拍子に、銅貨の音の

「やい、健、女に構ふない、此方へ来い。」

聲とともに、ポーンと縁側へごむ鞠が躍込んだ。

「何處から呼んでるの？」

中の娘が、

「ゴルフはね、お庭の椿の樹に上つて居ます。」

「……ゴルフ。」

と圭吉が聞いた。

「渾名なんですよ、此處に居た健の上なんです。」

「ゴリラだわ。」

と上の娘が、さますやうに言ふや否や、又一ツ鞠が飛んだ。

「壯だなあ、肩がきつきかい。こゝに居た勇士にもありさうだね。」

「えゝ、ジャツキー。」

「ジャツキー？」

「活動寫真にあるんですとさ。」

「あゝ、辻貼紙や廣告で数々お目に掛る、當時天下の豪傑だね。しかしよくお育てなすつた、——

とこの癖の、外套を引しやなくつて、鈕を外して、「遣つ了へ、持つてけ。」と、ぐら／＼と首を掉る。其の時は自動車だつたが、電車でも道傍でも此を遣る。……「此頃は着てるよ、大丈夫だよ。」と圭吉が肩を抱いて壓へると、「うゝ、運轉手に遣つ了へ。」と身悶えをしながら、「圭さん、頼む……お銀に飯を食はしておくれ。」「……」「飯を食へと云つておくれよ、僕も不心得だが、何うにも弱つた、何にも食はない、段々瘦せる。……遣切れない。あやまる、すまん、あやまるから飯を食へと——君が言へば屹と聞くんだ。——頼む。」と、のめるやうにお辭儀をして泣いて居た。自動車は築地の別宅へ向つたが、其の晩は寄らずに歸つた事がある。

「何が何でもね、時さんは、どんなに其を心配して居るか分らない。——食へなくつちや不可いね。」

「咽喉へ入らないんですよ、我慢にも——はじめはね、口惜くつて、食斷ちの……」

と、さすが言淀み、櫓に落ちて散亂れた緋の袴のひら／＼を、それともなしに搔寄せる指の弱さ。吐く血を悶ゆる手とも見えれば、また唯花片よ、其のまゝに、母鳥の餌になれかしと念じられた。

「……いつかも圭さんの御意見から氣を取直しましたけれど、今度は食へたくても食べられません。尾籠なお話なんですが、食へると直ぐに吐すんですもの……えゝ、薬は三度々々。それでも、

朝、牛乳が半合ばかりと、あとは、おも湯のやうなのがお茶碗に一杯半ぐらゐる納りますばかりです。」

「それぢやあ活きちや居られない。」

「えゝ、もう、お暇乞がしたいんですわ。」

「また、馬、馬鹿なことを——以前、あなた、更科で何うしました……かけつけに蒸籠が三枚、天麩羅二つ、おかめ一杯、蝦の鬼殻焼が一人前か。透かさずおだまきを根こそぎにして、合の手蒲鉾さ、あと口だと云つてあたり芋をべろりと退治て、鬼神を驚かした事があるぢやあないか。再び巴におんななさい。」

「ほゝゝ、」

とはじめて莞爾して、胸も息も引きながら手を掉つた。

「後生々々、……それだけは……小兒だちに聞えて御覽なさい。……さうでなくつてさへ、暴れぐひをして、私をば呆れさせます。お惣菜のがんもどきなんか、丸ごとよ、大井に山のやうに積出すのが、アツと云ふ間に消え了ひます。半べんの附焼でも御覽なさい、まるで、手品の蝶々のやうに、ちやぶ臺の上を飛ぶんですもの。お前いくら食つた、姉さんは何杯、と御飯をね、マラソン競走で食べるんですからね。やあ、兄ちゃんより二杯少い、負けるものか、ウーンと云ふと、

うしろへ手を支いて、下腹を突出して、胸をすかせては詰込むのよ。女中が追焚をする間、フレ
ーフレと云つて、どしどし壘を揺りますわ。」

「まかなひ征伐だ——暴徒だなあ。」
圭吉は舌を巻いた。

「親の因果が子に報ふと云ふのですかね。——惜みはしないけれど、觸るだらうと思つて叱言を
云ふのも、大抵寢床に居るんですから、しめしはつかず、私の言ふことなんか一つだつて肯きは
しません。父さんが居ればですけど……圭さん、築地から歸るのが、一月に一度か、二度……
尤も板橋は不便でもありましたけれど……だもんですからね、小兒たちがね、(うちのお父ちや
んは、顔も洗はないで、朝御飯も食べないで、何處へ行くんだい。お母ちゃん。)それで居てさ。」
と言葉が途絶えて、

「御近所の方がさ、(ついお見掛け申しませぬね。お父ちゃんは、)と聞くと、小兒がね、誰も教へ
ないのに、(旅行——)ですつて。——私や、私や……
と又途絶えて、

「それですもの、偶々歸ると、小兒たちが、(入らつしやい。)ツツて言ひますわ。……出て行く時
は(行つてらつしやい。)健なんか、(然やうなら。)だわ、私や、私や……覺悟はして、あきらめ

て居ますけれど、活がひがありません。——あの、末の兒も、喧嘩したり、人様に憎まれさへし
なければ、踏まれも蹴られもしますまい、もう私……」
片手で襖を半ば引きつつ、そつと袖口を目に當てた。

「……圭さん、眞個にお暇乞がしたうござんすよ。」

「お銀さん、お銀さん。」

圭吉は低聲ながら力を籠めて、

「何て意氣地がないんです。病氣は半分氣からですよ。元氣で追拂つてお了ひなさい——引込思
案ばかりして居ないで、時さんを惚れ直さして遣る勢でなくつちや——第一、今日は服装のせる
か、年も十ウばかり若やいだ。」

「い、え、引摺つて居て何ですけれど、引越の時着換へたまんま、脱ぐのも、ついおつくふで、
自分で折畳みが面倒なものですからね。」

「振袖でも紋着でも、ずん／＼引出して着るんだね。——三四年前だつてか、あなたがはじめて、
築地の事を私に聞かして、……其の時はじめて、餘り鬱々から氣晴しだ、と云つて、煙草を喫ん
で居なすつたのを見て、一寸、三十を越してから、たばこを喫むのは容子のいゝものだと思つた。
……あんなに引かぶつて居つても然うだもの。薩張と綺麗にして、お化粧もしてさ。」

「まあ、まさか。」

「……まさかッて事がありますか、少々ごて塗で構はない、髪も結つてさ。」

「こんな髪を。」

「うむ、餘る……まだ房りだ。」

「嘘ばツかり、圭さん。」

と、それでも嬉しさうに、見て欲しさうに、頸を白く、横に髪を傾けて、たよくとして肩を落した。

——目の赤い、白髪の媼が、三たび、座を横切つた。——

「あ、電話があるね。」

「お弟子が世話をして下さつて、電話つきで借りたんですが、——何處？」

と一寸膝を伸した。

玄關うらには、上の娘が末の娘を抱いて立つて、その末のが電話を聞く。……

「あの児がうまいんですよ——うちへなんて、何處からも、めつたに電話の用はないんですよ——何處だよ？……」

「お父ちゃん——然よなら。」

「待つて居るツて、然うおいひよ。」

上の娘が抱きながら言ふと、

「切つ了つたよ、……姉ちゃん。」

「……………」

「あのう、あのね、晩に歸るツて、……そして、お酒は、お爛のにするからツて。」

「贅澤な事を言やあがる。」

と圭吉が思はず言つた。

「小父さんがいらつしやると言へばい、のど。」

「でも、私、名を知らなんだもの。」

「道理だ。」

「あ、ね、道理だね、築地の姉ちゃんは綺麗だから、圭をおぢちゃんも、彼方へばかり。」

「くだらない事を、小兒の前で、何だ、あんな南京鼠。」

「え、」

「だつて、目も鼻も口も一所、すべてが小柄に、くるくと器用に来て、利口でこつとにかたまつて、ひよいくと小廻りに廻る處は、まるで南京鼠ぢやあないか。あなたは、皺びても……」

怒らないで、怒らないで……鶴なんだ、お銀さん、何を、南ちゃん、鼠なんぞ。——確乎おし、その皺を、すべくと白い膏のやうに、したゝるばかりにして見せる工夫があるんだ。恰も可、時の奴が晩に歸るは面白い。……女中は居るね——可、拙者自分に臺所へ罷出る。お勝手を拜見ながら……あなた立つちやあ不可いよ、堅く可いかい。先づ……熱燭を一銚子と……」

五

「お銀さん。——い、話を聞かせよう、——髮結さんもお聞きなさい。」

長火鉢のわきの窓下に、お銀は思切つて頸をのべて、むきみ屋の婆さんに髪を結はせて居た。何年にもない、此の光景を希有がつて、上の娘まで寄つて見る。その小兒たちに取巻かせて、布袋の腹へ入つたやうに、炬燵にすつぽりと潜つた圭吉は、から子の年増で寝そべりながら、手酌で傾けて機嫌で居る。

「其處でと、……お銀さん、例の見合の時以來の墓口を、一寸、其の帶の間からお出しなさい。」

「い、え、違ひます。とに角お出しなさい。——あ、姉ちゃん、憚り様。——其處で話です。……私の、本郷の伊達先生が、その、髮結さんのお馴染の奥さんと、新婚旅行の時なんだが、こ

こは一つ。」

と、きちんと起きた。

「二十五と、お十九さ——何うです、たゞ事ではない。お年ごろだらうぢやないか。……場所が江の島でね、二日めのお午過ぎ、いづれ、お目覚めは午を過ぎたとしてね、……一昨日からの、若奥様おぐし上げと成つた。盛場の遊び場だ、不自由はあるまい。……髮結をと成つた時、客で居て、おなじ旅館で、名乗つて出たのが、その髮結のお園さん。」

「それでも若うござりましたなあ。」

「寫眞館の色男と、多分一所だつたらうと思ふんですがね。」

「ありがたい。」

と氣味のわるい感謝詞。

「お年ごろなり、御容色なり、お髪の見事さ、一世の晴に、家業冥利におぐしあげがしたいと言ふのだ。……美談です。尙ほ偉いのは、高島田も人並には結びますけれど、(てんじん)ならばと云ふ申出だ。そのまゝ、東京へお歸りに成つてもと云ふんだとさ。」

「ありがたい。」

「奥さんはね、のちのお話で、ゾツと身ぶるひをなすつたんださうだけれど、異だ、と先生は、

髪結さんの氣を買つて、そこで、きやうだい、くしげ、と成つた。桂に蘭の香の、丈に餘るのを、うつくしく捌くの、先生もお若かつた。……寝轉んで、金ぐちをふかして見ながら、其の時さ、（おい、紙入を持つてるかい。……お出し、姫ごぜとあらうものが、錢勘定なんかするものぢやないよ。……醋いね、先生は——髪結錢も宿の拂も、新夫人の懷中が大半豫算に入つて居たんだ。其切、お取上げ。……唯今の此の臺口のやうな目球の金めつきの剝けたのぢやあない。銀のびらびらのついたはこせこですよ。光つたね。」

「ほんに〜輝きました。おぐしも御容色も眩いやうでござりましたぞいなあ。」

「その上に美談がある。大家のお嬢さんがお嫁入の晩、母君から渡されたまゝの紙入だから、餘程あつたに違ひない。が奥さんは、いまもつて金額を御存じないと云ふんです。此をきくもの、若返らざるを得ませんや。……髪結さんも、きちんと腰が極つて來たぜ。」

「ありい。」

「その日さ、あとで山道を御散歩です。巖角、石段に落椿が燃えるやうです。」

圭吉は、輪のまゝの椿を拾つて、うつくしく炬燵に重ねて言つた。

「針も糸もはこせこにあつたかな、奥さんに手傳つて、先生は花瓣をおぬきなすつた。其時……」

おち椿つまにさゝ折る山路かな
紅葉先生の句——拜借。

と云ふ俳句があります。極彩色で一対です。わかいものより、大人より、片瀬、腰越の小兒どもが當てられた。わツ〜と言つて囃したとさ。」

「お十七八、 だきごろ、ねころ、

お手を曳 きごろ、だましごろ。」

「ありい。」

「……と恠う言ふんだ。潤達な先生だもの、何、それ式に——（兄哥や、おもしろい唄だな、教へてくんナ。）スケッチブックにお寫しなすつた言ふんです。若返らざるを得ないぢやないか。」

「お十七八、 だきごろ、ねころ、

お手を曳 きごろ、だましごろ。」

「お十七八、だきごろ、ねころ……」

娘が口ずさんだ。

小兒もつゝけた。

「……だきごよ、ねごよ。」

「うまい、やれ〜、皆で唄へよ。」

「まあ、まあ、圭さん。」

「何、お邸ぢやあなし、腹の中から紅かねつけてるお家柄だ。」
むき身屋の婆さんが、とりわけ變な感謝詞……
「ありい！……」

六

「お初、お初。」
「へいッ、旦那様。」

一口坂の上を九段の方へ、自動車が颯と走る。……それから出たのであらう、門までは何となく遠慮をしたかも知れない。……坂の下口で、藤枝の時は、小走りに刻んで来る我が家の女中を呼留めた。……あの人数で、時々賄退治を遣る家庭だから、女中はがせい一方のまだ年のわかい山出しであつた。

「買ものか？」

引越にも居合はさなかつた留守の様子に、搜りを入れて見たかつたのである。

「へい、と、きよとついた顔をしながら、

「買ものではねえです、旦那様、内は、へい、大變だよ。」

時太郎は我にもあらず色が變つた。

「御病身な御新造様が、今日は、へい、お湯さ入らした。それは可え鹽梅だがや、をかしなお客様が來さしつてよ——御新造様と炬燵の間で、泣いたり笑つたりさしつけえ。何が、其のお客様は、勝手に臺所へ突入つて來て、自分でお酒の燗をつけるだアね。不都合な事だ思ひましけんど、それは、へい、私が知つた事ぢやねえで、何も構はずと居ましつけえがや、やんがて經つと、臺所口から、陰氣な、氣味の悪い、赤目ツくされの白髪によぼくした婆々がや、ふはく入つて來て、スイと茶の間へ突抜けただね。私や、ぞつとしました。何か、取揚婆の怨靈のやうなその婆々が、御新造様の髪を結ふだ。これ、御新造様は、かほそい身體で、膚脱で、お白粉だ。眞白な抜衣紋でなあ。……その氣味の悪い婆々が、髪をへい、梳す處が、蛇で成つてのたくるやうだね。だんく結上げる時分にな、お客様は、炬燵で酔拂つて鼻唄だ。何とや、旦那様……お子たちがね、嬢さまも坊さまも手を敲いて一齊に唄出した。はい、私らが聞いても、小恥かしい、だくわ、ねるわちて、面さ赤く成るやうな唄さ囉すと、御新造様は、べらくぞろりとして、何か、背戸の椿の花の樹の下を、紅色の處をお客と二人で練るでねえか。——髮結の婆は、長火鉢のねきで、い、茶をくらつて、煙草をふかりく吹かすだねえ。惡魔と痘痘神が一所

に入つて、お家中氣が違つたつら。……私ら、板橋から引越す時に、此のうちさ世話をさした、旦那様のお弟子の嬢さまのお邸だ。御新造様は病氣だし、お前様はお留守がち、あとはお兒たちばかりだから、何事かあつたら、すぐ来いよ、言はつしやるもんだで、此のさ、郵便箱の横町へ、いま、へい、駈けつける處だあね。へい。」

と、せい／＼言つて、魂消て居る。

吻と息して、

「まあ、待て、……あ、可かつた。待ちな。……そんな事を觸込まれて堪るものか。」

じり／＼と、おのづから横狀に歩行き寄る。

「何、小兒が皆で。」

「あ、いま留んだかね。」

と聲をひそめて、尙ほきよとつきながら、

「其處さ出た時まで、ワツ／＼と唄が聞えたただかね。」

何故か襟巻を深く引きしめて、時太郎がつつと入ると、寂然として、悚氣と冷い。炬燵に、遙かなやうに、新しい電燈の影は月に似て、紫てんじんの、ゆかりの色も露のしたゝるばかりなる類なき、艶麗な婦人を視た。

ツンとして斜にうしろ向きに背いて、澄して居る。

一步すさりつも、白足袋で、スツと寄つて、

「おい。」

いや、其の聲のかゝるが否や、ポンとはずんで、アツ、横頬へ鞆が當つた。縁側から、ばらばら、ばら／＼と、落椿の燃ゆるが如きを、娘たちが手に／＼ぶつけて、三ツ五ツ十ヲ、隙間なく浴びせかける。花片の緋を鏝つて、猛然としてゴルフ將軍、的は近し、射ごろ可、手鍊なり、袂懐一杯に、鞆を擱んで、父親の眉と言はず、鼻と言はず、眞額を狙つて、矢つぎ早に射すくめると、足が亂れてよろめく處へ、あ、此も母さんの骨に透つた、押入の生壁が雫の垂るま、座敷に積放しの夜具の蔭から、白兎を輝かして、伏を放つた急先鋒、踊上つたジャッキー豪傑。

「ヤツ、シイ、ヤツ、シイ。」

拳闘構の拳を下段に、丈もちやうど、そのくらゐ、父親の男の唯一の急所を狙つて、

「ウン、ウン、ウン、ウン。」

と突いて突いて、突立てる。

「あ、痛、あ、痛、痛、ほんとに痛い。」

「ジャッキーだぞ、やい、クーガン君を知つてるか。」

「痛い、痛い、痛い。た、た、た。」
父親は、あとじさり、ひよろ／＼と成つて、足袋蹴足で式臺へストーンと落ちた。

泥のついた足袋をつまんで、しよぼけてそツと又入ると、今度は立つて迎へようとして、力なく、よろめいて、棲うつくしく炬燵の上にトンと腰をついた、女房お銀の手を、と跪いて取つて、熟と顔を、見合せたのに、圭吉がほろり涙ぐんだ時、ジャッキは父親の肩につかまり、ゴルフは背を撫で、娘たちは、膝に縋つて皆泣いて居た。

——髮結について、その時の話があつて、上手を僂ばせるやうである。……圭吉がむき身屋へ、その、「てんじん」を、お銀のために頼みに行くと、もう、久しい間、忘れたやうに髮を手掛けないから、と云つて、何うしても背がなかつた。わけを云つて、是非にと頼むと、元結を選んで欲しい……いま時では、と云ふ。しんまで紙ばかりでよつたのは、此の近くでは四谷の大横町の小間もの屋にあつたが、今では何うか、と言ふのである。買ひつけの魚屋の小僧が、此の邊もまはり場だと見えて、折よく自轉車を飛せるのを呼留めて、その大横町へ馳らせた。

爺さんが首を振り／＼、あさを剥きつつ饒舌る……百々平の馬が越前の馬場をまだ一廻りし

ないうちに、小僧は歸つた。元結はあつた。媼さんは、解いて扱いて額いた。しかし、なか絶えた術の此の齒でしまるだらうか、とて、しばらく傾いて案じたが、「お爺さん。」兩膝をつくと、いきなり、親仁のすべ禿の頸窪にむじや／＼と總髪が残つた奴を一抓、きり、と巻いて、引きしめて、口に結んで、ツ、と張つた。元結は輝いた。「痛え、痛え、何をやるや、婆さん。」股引でもがいて、仰ぎ状に、思はず拂つた、貝むきの小刀で、プツリと切れると、上手がしめた元結の張が餘つて、仰むけに、脛を空に水を刎ねて、ひつくりかへつたのは百々平である。曲垣平九郎落馬した。

唇の元結が又光つて、お園の刀自は微笑んで、しやんと立つた。

昭和十五年十一月十五日印刷
昭和十五年十一月二十日發行

鏡花全集第二十二卷

(大森製本)



著者

泉鏡太郎いづみ かがやき たろう

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市下谷區二長町一番地
井上源之丞

印刷所

東京市下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

電話(33)二八七・二八八番
九段(33)一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番

小店出版物中、萬一不完全な品(落丁・亂丁)等がありました節は、御手数數作ら洩れなく御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましたも、早速お取替致します。





